No.27 March 1999

特集 「家族」を考える

Womanspirit

図書館資料
平 11. 8. - 1 成
国立婦人教育会館
女性教育情報センター

フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集　「家族」を考える

父との「訣別」……平嶋三生子 2
男兄弟の「ヨメ」たち……下村美恵子 5
お母さん、あなたのそばでは憩えない……千葉　悦子 8
ポーランドの子どもたちと母の記憶……平野　裕子 12
家族関係は最小……岡崎　公子 15
気になる彼女……中島枝美子 19

性と国家

加害の国で被害者として生きるとはどういうことか……李　文子 26

女と国家―観念による呪縛
A『古事記』(二一)……河野　信子 34
天理教と女性(前号を読んで)……児玉佳奥子 36
「わが中山みき」を読んでの感想……勝又　美保 44

一九九八年活動報告／会計報告……45
INFORMATION……46
編集後記……49

父との「訣別」

平嶋三生子

父は、お金をテーブルの上に置きながら、いつになくしんみりした声でこう言った。「いつまでも、こういうことが続くと思うなよ。俺たちも、もう年だからな」「うん」とうなずくと、私は感謝の気持ちですなおにそれを受け取った。十一月、高校の同窓会で帰省した折の、父とのやり取りの一部である。

父は、私が年に二、三回帰省するたびに、幾ばくかのお小遣いをくれる。本来は、年金生活者の両親に私がお小遣いをやらなければならない立場なのだろうが、私はそれをやっていない。知り合いに話すと、大抵は口には出さないまでも「エッ」という反応をする。いいじゃない、私はそう思う。「お前たちが小さい頃、よその子供がしてもらっていることを、俺たちはしてやれなかった。仕方がなかったんだ」父は言った。「うん、わかっている」私は深く、深く、うなずいた。お金は父にとって、自らの贖罪の気持ちを表現する手段なのだと思える。痛ましくもある。過去のことは、もう、ゆるしているのに……言いだしかねて、まだ伝えていない。

私には、両親と兄が一人いる。両親は、館山市で二人暮らし。兄は大学を出るとすぐに結婚し、新聞社に勤務しながら、習志野市の団地に妻と娘と住んでいる。私は、同じ習志野市に独り暮らし。職場を転々としながら、今の会社に落ちついて八年になろうとしている。営業部の事務をしている。結婚の経験はない。両親は、個人的にはそれぞれいい人だと思うのだが、相性が悪いらしく、七十代の今でも、父はカーッとなると暴力を振るうらしい。今話題のドメスティック・ヴァイオレンスというやつ。定年退職して家にいるようになってから、母が被害を被る率は高くなったようだ。一度、兄夫婦が母を引き取る提案を母にしたらしいのだが、当の母が断ったらしい。私は私で、母を引き取れない己の経済力のなさを不甲斐なく思った。父の高ぶった声を耳にしたり、暴力を振るった話を聞くと、湧きあがる怒りと屈辱感に心を乱したものだ。口出しはもちろん出来ない。経験から、火に油を注ぐようなものだと知っていたから。ところが今では、「しょうがないなぁー」と、冷やかな娘になった。二人の立場がそれぞれわかる（暴力は認めない）。それに、二人の会話や様子を見ていると、独り身の私には、「どうもわからない、夫婦って」となる。不穏な空気が漂っているかと思うと、思いやり合ったりもしている。ちなみに言うと、家族問題に話が及ぶと、共依存だの、境界線が引

けていないだのと、わけしり顔に講釈したがる人がいるが、私は嫌いだ。とにかく、様子を見ながら、試行錯誤でいくしかないと思っている。

両親を、まがりなりにも受け入れ、適度な距離を置いてつきあえるようにようになったのは、ここ一、二年のこと。それまでは、ただただ、わずらわしく、うとましかった。私は淋しい子供時代を送った。貧しかったこともあるが、何よりも、両親の間がギクシャクしていたことが私を一番淋しくさせた。父が母を物のように扱っているのが子供心にもわかり、次第に人間不信、虚無感に捕らわれるようになっていった。それが後日、キリスト教に私を結びつけることになるのだが、ハッピーな展開には必ずしもならなかったことは、前号に書いた。

父と母は、一応、恋愛結婚をしたらしい。看護婦をしていた母が農家の跡継ぎと結婚するにあたって、親族会議が開かれた。「あんな女に、百姓ができるものか」と言われたという。できた。村でも一、二番の働き者として長老格の人から評されたと、母が話したことがある。私の記憶にも、母は朝早くから夜遅くまで、雨の日も風の日も田畑に出かけて行った。梅雨時に、蛙がゲコゲコ鳴くのを聞きながら、母の帰宅を淋しく待っていた記憶がある。とにかく、働いた。意地をもってくれと夫に言われ、鼻唄を歌ったりして台所仕事はしないでくれとも言われたらしい。一方、私が幼い頃の父の記憶はほとんどない。どんな仕事をしていたのかも、知らない。たまに帰る父はいつも飲んだくれており、無免許でバイクに乗り、事故って家に運び込まれた時が一度ならずあった。母によると、トラックの上乗りをしたり、農協の組合長をしていたらしいのだが、人のいいところがあるのと、虚栄心の強さも手伝って、ツケで他人にご馳走したり、大酒飲んだりで借金をつくっていたらしい。

大学生の頃だろうか。母に聞いたことがある。「なぜ、離婚しなかったの？」「あなたたちがいたから」と母は言った。昔、看護婦をしていたくらいだから、離婚してもどうにかなっただろうにと私は思うのだが、母には母のこだわりやら、世間体などというものがあったのかもしれない。責める気はないが、理解はできない。「早く家を出て自立したい」それが私の切実な願いだった。

父と母に共通しているのは、教育熱心だったということ。私が中学生の頃、父は郷里を後にし、東京に職を得ていた。相変わらず貧しかったが、「お前がその気なら、お父ちゃんは一生懸命働いてお前を大学に行かせてやる。これからは女にも教育が必要だ」と父はよく言った。私は欲がなく、女子高校へ行っていつかは結婚し、絵などかいて暮らしたいと思っていた。それ

を覆したのは母だった。「T子さんは、あなたより成績が悪いのにA高校へ行って大学へ行こうとしている」と不満げに言った。進路決定の最終面談で、私は突然、A高校への進学を決めた。その頃、高校へ進学するのも珍しく、ましてや大学へ行く人などいない土地がらだった。女のA高校への進学は、大学進学を暗示していた。当然、妬みや中傷の的になった。私の進路変更にクラスメートの態度は冷たく、暗黙の意地悪に泣いて家へ帰った記憶がある。母も大層、陰口をきかれたらしい。そんなことでひるむ母ではなかった。その点では、父と母に感謝している。

問題は、私の結婚相手としては、大学出でなければ駄目、しかも私の出身大学よりレベルの高い大学でなければならないと決めていたこと。私もすっかり洗脳され、そう思い込んでいた。アプローチされても高校卒だからダメ、××大学だからダメ、親がガッカリするから・・・という具合。私は大学生の頃からキリスト教会へ行っており、クリスチャンと結婚したいと切実に願っていた。当時、信仰者でない者と結婚することは「罪」とまでみなす傾向が私の所属教会にはあった。それを裏ずけるように、パウロの言葉がよく引用された。「あなたがたは、信仰のない人々と一緒に不釣り合いな軛につながれてはなりません」大学出で、クリスチャンで信仰深く、ハンサムな人（私は面食い）・・・そううまくいくものか。だからという訳ではないが、かつて夢中になったパウロ書簡も、今は読む気にならない。パウロは嫌いだ。ビョーキになりそうで。

とにもかくにも、両親から受けた影響は大きい。今でもどこかで無自覚に操作されているのかもしれない。不都合な時には軌道修正すればいいと思っている。総じて、家族を顧みなかった父と、兄を溺愛して私を放ったらかしにした母。淋しさと共に、私の心の奥深くには、怒りがとぐろを巻いていたことは隠せない。芝居やクラウニング、踊りのワークショップなどに参加することで、自分を見つめ少しずつ自由になっていった。それから時は満ち、開放される時はひょっこりやって来た。マザー・テレサ。彼女の言葉に接した時。

「私は貧しい人々を知っているだろうか。食べ物に困ってはいないけれど、貧しい人々が自分のごく身近に、まず家族の中に、家庭の中にいないだろうか」

私はとっさに、父を思い浮かべた。妻にも、子供たちにも、孫たちにもうとまれている父。私は本当は父の淋しさを知っていた。たとえそれが自業自得であったとしても。

すぐに受話器を取った。一年ほど音信不通にしていたので、近況を話した。元気なこと、インドへ行って

きたことなど。「そうか」と言って、父もポツリポツリとものを言った。電話をきってから私は泣いた。誰に言うでもなく泣いていた。ごめんなさい…

その後、帰省した折、母が私にお菓子の袋を差し出して、持って帰って食べなさいと言った。自分たちで食べればいいのに、と言うと、母はニッコリし、「あなたに食べさせたいの」と言った。その言葉で充分だった。もうこれでいい、そう思った。とっくにゆるしていたけれど。

最近では奇妙なことに、私は父と母に愛されてきたのだと思われることが頻繁にある。とぎれとぎれに、昔、両親がしてくれたことを思い出す。ああ、私は愛されていたんだ、フト、そう思う。母は私が独りでいることを心配しているが、私にはとっくに結婚願望がない。むしろ、女は結婚するものという社会通念に振り回されて、仕事として専門分野をもたずにきてしまったことを残念に思う。

つい最近、上野千鶴子さんのエッセイを読んでいたら、こんな文章があった。

「現に作家の三枝和子さんは、女はほんとうは男要ラズの自己充足性をもっているのだけれど、ホントのことを言ってしまうとミもフタもない—その上、自分とコドモを養ってもらえない—ので、男が必要なフリをしているだけなのだと言う」

嬉しかった。味方を得た心境というのだろうか。さっそく三枝さんの本を読みだした。三枝さん、心変わりしないでね。

追記

大晦日に兄夫婦と共に帰省した。翌朝、父は、兄と私を呼んだ。目に涙をため、口もとを震わせながら、お前たちが幼い頃に充分なことをしてやれなかったと言って詫びた。私は、もう気にしていないし充分してもらっていると言った。父は納得せず、首を横に振った。後で母に、「まだ気にしているんだね」と言うと、「んー、気がすまないんでしょう」とのこと。ついでに「お父ちゃんが死んだらどうする?」と聞くと、神妙な面持ちでこう言った。「年金がおりなくなると困るわねぇー」私もお金はありがたく頂戴した。

男兄弟の「ヨメ」たち

下村美恵子

「長男のヨメ」なんていう人種は、早晩絶滅する運命にあるとしても、どっこいまだまだこの縛りの連鎖は女たちを当分苦しめるだろうことは確かである…と思う。私はこれまで随分人を傷つけて生きてきた。とり

わけフェミニズムらしき毒が全身に回り始めてからは、あらゆる場面で自分に無理をしないように生きようとして、義理を果たさなくなり、小さな顰蹙は買いっ放しになっている。つまり「嫌なものは嫌」であるということだ。

職場の忘年会や旅行、歓送迎会不参加などはまだいいとして、特に親兄弟、夫子どもとの間の世間的、道徳的、儀礼的モデルルールを疎んじて自己都合優先の生活をしているので、特別視されていることだけは確かである。いかんともしがたいのが葬式である。その一部はいつかの当誌に掲載させてもらった。葬式はこれまで私の父母、夫の母のとが三回あったが、これにはさすがの私も欠席するわけにはいかなかった。なにしろ長女だし、長男の「ヨメ」でもあるからだ。それに故人を悼む気持ちは強く持っていたし。

夫は長男で四人の弟がおり、私は長女で三人の弟がいる。それぞれすべて結婚して独立した家庭を営んでいる。両方の親との付き合いもさることながら、兄弟やその「ヨメ」との付き合いとなると、私にはとても荷が重くて、ほとんど没交渉を決めている。だから葬式で会っても話題に事欠く。気の利いた世間話がどうしてもできない。というと喧嘩状態かというとそんなことはない。喧嘩というものは、ある程度の関わりがあればこそ、意見の対立や誤解が生じることから始まるわけで、没交渉なので喧嘩のチャンスはないというのが実情である。

そんなことをちょっと親しい人に言ってみると、無理して付き合う必要なんてないじゃないの？とたしなめられる。そりゃそうだ。夫とはその時一応は気に入って一緒になったが、その弟とか弟の妻なんていうのは、気に入る入らないという選択の問題ではないのだから、できればついでに気に入ってもらえたらいいというくらいのものなのだ。

私がここでこの種のことにいささか思い悩むのは、夫である男たちを除外して女同士が、つまり「ヨメ」同士が和気靄々、この世の不条理を語り合っている実例を知っているからである。せっかく縁あって知り合ったのだから、まあできれば仲良くしたいと単純に思っていた私は、それが囚われた考えであるのかも知れないと自覚しつつ、合計七人の義理の妹？（そうギマイなんて言うのはピンとこないわ）がいるのだから、一人くらいフェミっぽい考えの持ち主もいるかも知れないじゃない？なんて思ったりしたものだ。そうしたら「ギマイ」なんて関係性など無視して分かり合えるいい関係になれるんじゃない？そう思っただけなの。だがそれは大甘だったってことね。

男兄弟の妻たちは（この言い方がいいわね）夫側四

人、私の側三人の計七人とも全部専業主婦でパートタイマーで良妻良母である。だからというくくり方はしたくないし、そのつもりもない。だが共通しているのが目につくのだ。

例えば、決断を要するものは夫が決めるから芯から物事を考えるという習慣がなく、ごく一例だけれど電話をしても速答できず、夫経由でしか意思表示してこない。話していても非常につまらない。常に夫を立てている。その代わりまめまめしく女役割はバッチリ率先してやるから、葬式で会っても細切れの話しかできないし、ちょっと時間が空くと夫に寄り添って甲斐甲斐しく世話をやいている。それを珍獣を見る目で見ている私…。

女性たちは争ってお茶や食事の用意にいそしむから、私はいつもまたかぁーと出遅れる。しかも大学生になっている娘たちにもやらせているのに、息子たちにはやらせない。そこで私は、かの夫たちである弟たちに言う。「男も女もみんなで分担してやろうよ。これじゃ女たちは疲れるよ」と。夫の手前、みんなの手前、いい妻を演じているフシが無くもない、あの「まめまめしさ」。それが板についていない私は、葬式や法事がたまらなく億劫である。いまではしかるべき施設を使って行なうようになったから、彼女たちのそのまめまめしさを披露する出番はぐっと減ったが、夫の母、私の母の葬式は自宅での執行だったから、それにはすっかり懲りてしまった。お茶の入れ方、おすましの作り方、漬物の切り方、物を出すタイミングから、どこから一番にサービスを始めるか、いやはや…。だれかが司令塔になって指示しなければ、こんなことはできっこない。それを怠っている私、長男の「ヨメ」がちっとも気の利いた動きをしないときている。それぞれが何かを感じながら、それぞれの配偶者間できっと気に入らないことの一つや二つについては話し合っているかも知れない。兄弟として上下関係で育てられてきているレキシがあるから、いくら独立して一個の家庭を持ち一丁前に働いていても、親や親戚の前では再び兄と弟の構図が働いて、それぞれの配偶者にまでその序列が及んでしまう。長幼の序というわけである。これに加えて男女の差別が付加されるのは、もう当然至極というわけだ。

日頃、女性問題を多少なりとも問題視している自分が、その実践を問われる具体的な場があったら、葬式という場に(ここではひとまず葬式そのものではなく)集まってきた男と女の織り成す姿を見て、気に入らないと文句だけを言うのではなく、少しは問題提起してみるのが義務と思っている。それには考えを同じくする人間が、一人でも二人でもいてほしいと思うのだ。

そのリサーチだけはしてみたいと思う。それだけのことである。

女性問題を認識していたり、関心を持っている者同士の集まりに出掛けると、そこに独特の臭いが立ち篭めてはいるものの、実にサッと意見の交換が可能なことが多い。無論反対意見にしてもだ。だが市井の数多の社会構成員の中で、いかに「女性問題は問題だ」を共感してもらう努力をするかを視野に入れるか、実は私はそれが課題だと常に思っている。そうでない取り組み、自分の主張しかしない取り組みは楽ちんだと思う。私の命題はやっぱりこれしかない。理論と現場の乖離をつなぐ回路づくりが必要だということ…。無論大した理論なんてもってはいないけれど。

さて「うちの人はこうなんですよ。本当に困っちゃう。お姉さん何とか言ってやってくださいよ」なんていい始めるギマイが一人出現した。私はこれを待っていた…ような気がする。

お母さん、あなたのそばでは憩えない

千葉　悦子

母の事を初めて書いてみた。ああいう事もあった、こういう事もあった。むらむらとわいてくる嫌悪感。そして、幾分かのためらい…。筋道立てては書けず（客観的になんて書けない）、結局支離滅裂なまま原稿を提出する事にした。その方が母と娘との微妙な関係にもふさわしいし、なんて言い訳しながら……。

今から一二・三年前の事だったろうか。

職場の友人がある新興宗教に入っていた。ある時、集会に誘われ、好奇心で参加してみた事があった。その教団のメイン儀式は、信者が「巫女」の様な人の前でおうかがいや祈願をたてるとその人が、「それは○月後に叶えられます」とか「○○というあなたも気づいていないあなたの欠点を直せば願いは叶うでしょう」といった、いわば託宣を授けるというものだった。（長い間不妊で悩み不妊治療をしても妊娠できなかった友人が、この教団にすがり、信仰する様になって数カ月後、儀式の時に懐妊を予言され、それが実現した事で友人はその教団にすっかり傾倒してしまった。）その儀

式が終わった後、参加者達の茶話会が開かれた。自己紹介の時になって私はふと、滅多に人には話せない私の中にある「母との確執」を正直に話してみた。悩みをもって集い、少なくても人間を越えるなにかの存在を信仰しているこのグループの人達ならばきっとうなずく人もいるに違いないという気持ちで。ところが、みんなの反応は違っていた。「あなたは親の有り難さに全く気づいていない」「お母さんがあなたに向けた冷たさって、本当はあなたを独り立ちさせようとする母の愛ではないかしら」こんな非難の声ばかり。ああ、言わなきゃ良かった。

そう。今でこそ、子供を愛せない母親、児童虐待、アダルトチルドレン、子供時代のトラウマ、等々、親と子、母と子の暗部がテレビで、新聞雑誌で取り上げられる様になったけれど、一二・三年前の日本ではそんな事はあるはずもない、仮にあったとしても口には出せない事だった。・・・隔世の感あり。

私は幼い頃から素直ないい子だった。親の望みに敏感だったし、望み通りになろうと一所懸命だった。勉強もよくやった。本もよく読んだ。でも本を読み過ぎると母が言うのだ。「算数の宿題は終わったの？理科は？」日曜日に好きな水彩画を描きたくても心の中の何かが押しとどめてしまう。自由に何かをやるって良いことなの？お母さんに叱られない？お母さんはまんべんなく全ての教科が優秀である事を望んだから。・・・・・可哀想に！私の子供時代は、親の望む型になんとか嵌まろうといつも親の顔色ばかりうかがっていた気がする。しかも母は私がどんなに良い成績を取って来てもほめてくれた事がなかった。足りない所を必ず指摘した。「字が下手だねぇ。従姉妹の○○ちゃんの様に書けないの？」「通信簿にはいつも『おとなしい』『積極性がたりない』って書いてある。これじゃ駄目だ」。私は駄目な人間だ。どんなにがんばったって駄目なんだ。

母の描く設計図はお決まりの「良い高校、良い大学に入り、良い企業に就職し、女は結婚し家庭に入り、一生安泰な生活を送る」このパターン。これ以外に幸福はないと信じていた。子供をそのレールに乗せる為に必死だったのだと思う。

又、その価値観も単純至極。・人の幸不幸はお金によって決まる。・女の幸福はお金持ちかエリートと結婚して主婦になる事。・お金の次に大事なのは「世間体」。（恥ずかしさついでに書くと、私は母の他人への無償の行為、募金や奉仕活動をしたのを見た事がない。又、愛情や感謝という自然な気持ちから人に贈り物をしたのも見た事がない。贈り物には必ず何かの意味がこもっていた）。

これってまるで戦後の高度経済成長期の代表的な日本人。物事を損得で判断し、その考え方にみじんの疑いも持たないらしい母に私は次第に嫌悪感を抱くようになっていった。

又、わが家では性的な話題（といっても、好きな男の子の事や、初潮を迎えた話など）は一切タブーだった。これはかなり息苦しい事だ。母親こそ娘のデリケートな悩みを分かち合える存在だと思うのだが、悩みを話せるような雰囲気はなかった。

毎日のこんな積み重ねの中で中学生位になると母と話もしたくなくなる。家に帰ってもつまらない。本屋をはしごしてなるべく遅く帰宅するようになる。するとますます心が言うのだ。お前は悪い子だ。家が嫌いだなんてお前は不良だ。子供時代は親を批判できるほど強くないもの。それで気持ちが引き裂かれてしまう。

思春期になり、自由な生き方を求めて試行錯誤を繰り返す私に、母はいつも「そんな事は世間が許さない」と言った。私と心と心、正面から向き合って本音をぶつけ合うなんて事は一度もなかった。その後、文学にのめり込んで放浪の旅に出たり、ある文学者のもとへと家出したり（実にエネルギッシュな少女じゃないか）まあ、確かに型破りといえば型破りだったのだが、家出先から連れ戻す時、母は「みんなに迷惑をかけて！」とそればかりを繰り返した。（迷惑だったら、ほっとい て！）一度も「あなたが大事なんだから、心配なんだから一人で旅なんかに行かないで」なんて言った事はなかった。

今思えば、あの混沌とした時期は「私って何？」「生きるって何？」という実存的な問いを発していた時期だったのだと思う。あの時、親が「なぜ？」と心底から私の行動の理由を問えたならば、親子ともに精神的な成長、深まりを見る事もできたろう。そういう大事な局面で、母は私に「反抗」「非行」というレッテルしかはれなかった。そして元どおりの傷のない家庭に修復したがった。子供の心よりも世間体が大事だったのだ。「私はこう思う」じゃなくて「世間はこう思う」だった。母の価値基準はいつも外側にあり、母という人は私にとって「世間」そのものだった。

親は私をぶった事も虐待した事もない。しかし私の存在が承認されたと思った事、私は生まれてよかったんだと実感した事も一度もなかった。子供の独自性を無視して親の望みに従わせるのを「やさしい暴力」というのだとか。母の何げない一言で私はどんなに生きる気力をそがれ、どんなに自らの飛翔を妨げられたことか。こんな家が世間からは「理想的な家庭」に見えるのだから尚更たちが悪い。

（ところで父には触れずにきたが、父は、と言えば、モーレツ社員を地でいく様な人で、家の事も子供らの

事も全く母に任せっきり。その意味でも高度経済成長期を代表する夫婦！である）。

私は母の信じる世界が空虚なものにしか思えなかった。「私は本当にこの人から生まれたんだろうか」「何故この人と少しの共通点も見いだせないのだろう」母がそばに来るとイライラする。舌がもつれてしゃべれない。母のそばではくつろげない自分がいた。

たまたまミッションスクールの高校に入り、初めて「わが家」を見つけた思いがした。そして、お金ではなく、世間ではなく、愛と献身に生き、生きる事の本質を追究しようとする少数の大人たち（シスターや教会の友人）と出会い、私が求めていたのはこれなんだ、と直感した。こういう出会いがなかったら私はどうなっていただろう。

（母とはその後肉親ゆえに様々な紆余曲折があったが、ある決定的な出来事があり、完全に母への気持ちを断ち切った状態で現在に至っている）。

振り返ってみれば、母への憎悪が私をキリスト教とそして後にはフェミニズムに向かわせたと言えるかもしれない。

反面教師として、必要な存在だった？

ある面ではＹＥＳ。ある面ではＮＯ。

先日、朝日新聞の日曜版に瀬戸内寂聴が萩原葉子の事を書いていた。「私が彼女と初めて会ったのは彼女が四〇位の時だった。太って陰気な、こちらと目を合わせ様としない、おどおどした感じの人だった。それが四〇数歳の時にフラメンコと出会い、一八〇度生き方が変わった」といった内容だった。萩原葉子が幼い頃、母親が若い男と駆け落ちし家を出たため、祖母に育てられる事になったが、その祖母は「母親に捨てられた子」とか「不器量な娘」と日ごろから言っていたそうだ。自分に誇りを持てるはずがない。それが四〇を過ぎた頃、踊りとめぐり会う事によって自分が解放され、本来の自分を徐々にとりもどしていき変身を遂げたのだという。

自分も丁度その年齢なので、読みながら「うん、そうそう」なんて言ってしまった。低い自己評価しか持てずに成長すると、絶えず翼をむしられているのと同じで、いよいよ巣立つ時になっても飛び立てないでしまう。私は実家がいやで東京の大学を選び、親元からは早々と離れたが、実は強い翼―それは自分への信頼という翼。社会という大空をはばたくための―を持たなかったばかりに低空飛行を続けていたにすぎなかったのではないか。

二〇歳まで親の影響下で育ったとして、その弱った翼を修復し、今度こそ大空に飛び立つためにはその年

月と同じだけかかるのだ。いやそれしかかからなかったならまだ良い方だろう。たぶん一生傷を引きずる人だっているだろうから。私は人との出会いに恵まれていた。そして、同じ価値観を持ち、駄目な私でも受け入れてくれる夫と出会った。(今思えば、夫と出会った時、私は初めて「家族に会えた」って思ったんだ。)そして二人の子供達を育てる過程で私自身が育った。それでも二〇年かかったのだ。そして今四〇が過ぎ、内面が初めて安定し、充実しているのを感じている。少々の山や谷にもびくともしなくなった。もうすぐ新世紀だしさ、私もやっと大空を自由に飛べるんだ、そう思わなくちゃ。

ああ、それにしても、ここに来るまで本当に長かったなぁ。

太宰治曰く「〝親がなくても子は育つ〟のではない。〝親ガアルカラ子ハ育タナイ〟のだ。」

ポーランドの子どもたちと母の記憶

平野裕子

私はポーランドの子どもたちへ必要に応じて絵本を送っています。そのことが去年の六月の例会に参加させていただくきっかけになり、その時入会させていただきました。

一九八九年の東欧革命から三年後の九二年から一年間、ポーランドのルブリンという町のカトリック大学の付属コースにポーランド語を習うため通いました。目的は、近隣三国に分割された十九世紀に、人々はどんな生活をしていて、どのように独立していったかを知りたかったからです。私の初級クラスの八人のうち三人がカトリックの聖職者でした。

その中の一人にスペイン人の若いシスターがいました。彼女は、フランスのジョゼフ修道会がその町に新しく造った、地域の子ども達の集会所「子どもの家」に派遣され、そこで働いていました。「子どもの家」はシスターの修道院と棟続きになっていて、管轄地域のカトリック教会へと隣接しています。時々そのシスターと一緒に帰るときには、「子どもの家」の子どもたちのことがよく話題になりました。

「アルコール依存症の父親のいる子どもたちがいます。「子どもの家」を閉館した後も家に帰らず道で遊んでいるのです。暗くてもう遅いのに、帰りたくはないのです。帰れば家にお酒を飲んだ父親がいるからです。」

子どもは家でどんな嫌なことがあっても、自分の家には帰るものではないのだろうか、よほど帰りたくない気持ちにさせるものがあるのだろうと想像しました。その話を聞いてからのちに、私は自分の子どもの頃のことを思い出さずにはいられませんでした。

私は群馬県前橋市で一九五〇年に生まれ、育ちました。小学校三、四年の頃一緒に住んでいた父方の祖母と母はよく言い争いをしていました。学校から帰ると二人の荒だてた声が否応なしに聞こえてくるのです。私は身を縮ませながら早く終わるように念じてみるのですが終わりそうもない気配を後に、家を出て学校へ向かいました。学校に遊びに来ている同級生と一緒に遊ぶときも、家の二人のことが気になって思いっきり遊べません。日が沈むと子ども達はそれぞれ家に帰って行きます。だんだん暗くなる校庭で、ひとり鉄棒の逆上がりや連続回転の練習をするのです。家ではもう終わったかなあと思いを巡らしながらも、帰りたいのですが帰れないのです。やがて校庭の前の文房具屋のおじさんが鉄棒の私を見つけて外灯の下からやって来ました。

「何してるの？　帰らないの？」

「鉄棒の練習をしているんです。」

「明日にして、もう暗いから帰りなさい。」

「はい。」

素直な返事です。しかし鉄棒の練習なんかをしていたのではなかったのです。「家で母と祖母が言い争いをしているので帰りたくない」のです。おじさんにはそう言いませんでしたが、誰かに言いたかったのです、聞いて貰いたかったのです。しかし言ってはならないことだと思いました。ポーランドのその子ども達は三十年以上前のその記憶と、さらにもうひとつの記憶を思い出させました。

三、四歳の頃、母から頭に怪我をさせられたことがあります。朝、目が覚めると風船が目に入りました。その風船を取ってもらおうとすると二歳下の弟も目が覚め、一つしかない風船は弟に渡りました。私は泣きました。すると祖母の声がしました。

「朝から子どもを泣かせるものじゃないよ。」

すぐさま私は母の脇に抱えられ外に連れ出されました。小川の縁に生えた刈ったばかりの篠の切り株に、足から逆さ吊しにされて何度も何度も頭を打ちつけられました。恐怖に一層激しく泣きました。

長男代わりの次男（長男は戦死）に嫁いだ母は、父の両親や弟妹の同居する十人家族のなかで、電化製品

のない時代に朝から晩まで働いていたのを覚えています。いつ起きていつ寝るのか中学に入るまで判りませんでした。働く機械のようだと思っていました。陰になり日向になり家を守り立て、舅、姑、小舅、小姑にもよく仕えるなかなか真似のできない良い嫁だと近所の人から言われていました。良い嫁といわれているのだから良い人に違いない、時々私を叱るのも私が悪いからなのだ、母の言うことをよくきけば良い子になれて身の縮む思いをしなくてよいのだと思いました。そして彼女の顔色を察して行動することが私の存在価値になっていきました。

また母はエプロンのポケットの中にいつも新聞の折り込み広告を畳んだメモとエンピツを入れていました。和歌を作るためです。時々ポケットからくしゃくしゃの広告を濡れて赤くなった手で取り出し、書きつけてある和歌を私に披露します。母が唯一自分に戻れる充実した瞬間です。

家父長制度という仕組みが大きく作用しているにも拘らず、ひとりの嫁が「家の中の雑事」としてその実労を請け負わざるを得ない時代でした。その制度で裏付けされた価値観を身体に刻み込み過剰適応したのが私の母だったのだと思います。彼女が一人前の人間として世間からも評価され生きていくためには、そうするしか道がありませんでした。その過剰適応には私というスケープゴートが必要でした。そして母もまたその制度のスケープゴートだったのではないかと思うのです。それは大多数の女性達が当たり前のこととして進まざるを得なかった道でもあると思います。ポーランドの多くのアルコール依存の人々もそれに至る何らかの背景を背負っているに違いありません。

しかしアルコール依存症の父を持つ子どもがどんな生活のなかにあって、どんな気持ちでいるのか、どう成長していくのか、心から笑うことはあるのだろうか、暴力は受けていないだろうか、自分の責任ではないことでも自分が悪いと思っていやしないだろうか、安心できる場所や人はいるのだろうか、この子ども達に自分の子ども時代を重ねあわせて案じざるを得ませんでした。

人は辛いとき悲しいとき、安心できる人に癒してもらったり励ましてもらったりしたい。子どもなら尚更です。何か僅かでも私にできることはないか考えました。文化や考え方の違いから無理かと思いましたが、日本で人気のあった絵本の中から数冊を選んで「子どもの家」の書棚に置いてもらえるかどうか尋ねてみることにしました。シスターは院長から承諾を頂いたことを告げ、さらに言い添えました。

「美しい内容の『からすたろう』に、子ども達は自分自身を見出すでしょう。」

との受け止められ方には胸が一杯になりました。
自分の国のことを棚上げにして、よその国の事情にお節介なことだと言われればお節介なことで、その上根本的な解決の助けにならないのは確かです。しかし心の置き場所がないときに、人は何かに支えられていたいと思うのは、人間であればどこの国のどんな文化に生活する人だって同じです。
クラスのメンバーで私だけがキリスト教徒ではありませんでした。それが生徒間で問題になるようなことはありませんでしたが、若い女性の先生は私に質問しました。
「あなたはフェミニストですか？」
「フェミニズムは理解しています。私も女性ですから。私はヒューマニストです。」
すると彼女は、
「フェミニズムはカトリックとは相反するものです。この国は共産主義というイデオロギーからやっと自由になったばかりです。カトリックはマリア信仰が大変大切です。マリア様はフェミニストではありません。解っていますね。」
と強い視線で私に念を押しました。小さい教室は誰も動きませんでした。
また別な男性の先生は、新約聖書の句を教材にしたことがありました（エペソ人への手紙・五章二二節：「妻たちよ。自分の夫に仕えるように、主に仕えなさい。」新共同訳）。それは私に向けてのメッセージだと、後で判りました。
カトリックの国のカトリック大学ですからカトリック色の授業が行われ教材が使われるのは当然です。そして一九八九年の東欧革命では、カトリック教会はその強力な推進力としての中心的役割を果たしたばかりでなく、一〇世紀もの長い間、ポーランドの人々の生活を守ってきた歴史そのものでもあります。そのあまりにも巨大な現実の前で、あまりにも小さすぎる私は、ただ、ただ立ち尽くしてばかりいます。しかしイエス・キリストは九十九匹の群れから迷った一匹の羊のために祈ってくださると信じて、歩いて行こうと思います。

家族関係は最小

岡崎　公子

何で私に家族関係について書けという依頼が来たのだろうか。これほど不適当な人選もないと思われた。なぜなら私は母と同居はしているが、ほとんど一人暮らしのような気ままさで、ほかに兄弟姉妹はいないし、叔父叔母の親戚も、父方は全部死に、母方も全然付き

合いのない老人の叔父と、老人ホームに入っている叔母が生き残っているだけである。

兄弟姉妹がいない一人っ子なので昔から家族関係が希薄だった。結婚もしていないので、はらわたが千切れるような姑との格闘や、嫁ぎ先の家族関係の中でもみくちゃになるという、恐ろしいけど生々しく生きている実感のある密度の濃い人生は、小説や人の話の中でしか存在しなかった。多くの女性が油絵のような濃密な生活を送っておられるとしたら、わたしは水彩画のようにきれいだけど迫力のない生を送っているのではないだろうか。

このあいだテレビドラマの「こら、なんばしょっと！」を見た。愛情深い母親を中心に、つぎつぎに起こる問題に明るく健気に立ち向かっていく家族が描かれていた。貧しさがマイナスに働かず、たとえそうめん一把を十人で食べることになろうとも「ね、食べていかんがね」と陽気に近所の人や主人公の友人に声をかけて賑やかに食事。「足らんがね」「我慢しとき」。こういう中で育まれる信頼、友情、親子の強い絆は私とは無縁だった、と思っていた。

しかし何十年ぶりで出席した中学の同窓会で、これも何十年ぶりで会って、かろうじて顔と名前の一致した同級生に「あなたが練馬に引越ししたすぐ後くらいだと思うけど、おたくに遊びに行ったことがある。そしてお母さんにやきそばというか、焼きうどん？うどんにお野菜とかいろいろ具の入ったのご馳走になったわ」といわれて私はびっくりした。その人が遊びに来てくれたという事実も、まして母が彼女に有り合わせの食事を用意したことなどまったく記憶にないからだ。彼女が私の家にわざわざ遠い大田区から来てくれたこともまったく覚えていない。卒業以来音信不通になったと思っていた。

このことは私に二つのことを考えさせた。一つは、昔、といっても昭和四〇年代頃までは、我が家のような小家族であっても、私に来た客でも、父に来た客でも、家族中で応対していたのだ、という事。父に客が来たとき、私は母の手伝いでお茶や食事などをサーヴしなければならず、また一人だけの子供ということもあって自分の都合で席を外す事は許されなかった。親戚や友人、知人にこの家の子という存在を認知、アピールさせられていたのだ。いつからそういう家族の統一行動が無くなったのだろう。やはり私が学校を卒業して勤めを始めてからだ。家族の行事に必ずしも物理的に参加できなくなっていったし、早く一人になりたかった。

もう一つは、私が無意識のうちに家族の絆とか親子の情とかを強く嫌っていたのではないか、という事。だから自分が忘れたいような家族の行動は全く覚えて

いないのだ。私は早く家族から離れたかったし、べたべたした親子関係が大嫌いだった。(余談だがＴＶのコマーシャルの風邪薬の母娘は大嫌い。子供が母親にお世辞をつかったりご機嫌をとったりするのを、さも美しい理想の親子関係だ、といわんばかり。見るたびにムカついてくる。)

父は自分中心の人間で、家庭的ではなかった。べたべたの家族サーヴィスはするのも、されるのも嫌いという性格だった。若いときから衣服は自分で選び自分で着たし(今では当たり前の事だが私の父の時代は妻に服を買わせ、出かけるときはコートを着せ掛けてもらったりしていたのだ。)妻の自由を束縛しない夫だった。ただし家事は一切教育されていなかったので、母が旅行などに出かけるとすぐに食事に困った。不器用な人で電気のヒューズ一つ直せなかった。今のようにコンビニがあればよかったのにと思うが、コンビニがあっても食べ物の好みがうるさい人だったので「コンビニのものなんか食えるか」というかもしれない。

母は母方の父親が家庭的で家族第一主義で子供のためなら何でもする、というような人だったので、その影響を受けている。しかし父と結婚して上海でくらし、外地の自由な空気をすったので引揚げてきて父の給料だけでは食べていけないとわかるとすぐ勤め始めた。家庭婦人で職業に就く人はまだ少なかった。給与生活者の働く女性は独身か未亡人が普通だった。母は働く女性として、家事と職場の労働と、差別の中で大変だったろうと思うがさばさばした性格で、差別を不当と思う事もなく、人の倍も働く事も仕方ないとあきらめていたのか愚痴も言わなかった。しかし考えてみると家庭的であるよう教育はされてきたが、本質的には家庭で家を守って一日中家事に明け暮れるというのが母は嫌いなのではないか。

こうしてみると両親とも家庭的でない。家庭に束縛されるよりも自分の好き勝手をしたい、良く言えば自由に生きたいという、早くから目覚めた人間だったと思われる。母は姑と同居という事もなかったし、嫁姑問題はなかった。日本の家族制度は崩壊したといわれ、そして現在は確かに核家族になり大家族は珍しくなった。それは私の両親のような人が多くなったという事ではないか。家庭よりも自分、家族のしがらみはいや。うちの両親は好むと好まざるに関わらず、長男長女でなかったし、子供が一人だったため核家族になった。またそれほど家庭的でなくても家族が崩壊する事もなかった。

両親は自分の老後をどうするつもりだったのだろうか。父は私をあてにしていたようにはおもえない。母は私をあてにはしていないが、さりとて他人と共同生活はしたくない人である。老人ホームなんかまっぴら

ごめん。隔離されたような郊外の知らない土地で、気心の知れない人たちの中で、自分の部屋に閉じこもって食事のときだけ出て行くような生活はいやという。ぽっくり死ぬのが理想だが、若死にだと死ぬとき苦しむから長生きしなくてはぽっくり死ねないという。私は薄情な娘に徹して、なるべく手を貸さない。自分の事は自分でする、という原則を互いに守って共同生活を現在はしている。が、いつ寝たきりになるかわからない年齢である。今の社会システムの中では私がいやでも世話をしなくてはならない。出来るだけ賢く、本人の意思を尊重しながら、他人の手をどこまで借りられるかが、そうなった時の母と私の課題だろう。

外出好きの母と違って、私は一人で部屋にこもっているのが好きなタイプだ。母と私の間に葛藤がなかったわけではない。母は古い道徳観を強烈に持っている人で、夫が愛人を持っても、いずれは本妻のところに戻ってくるのだから、妻は離婚だなんだとがたがた騒ぐ事はない、という考えだった。また子供を捨てて別の男と結婚する女に対する憎悪感もすごかった。あるニュースキャスターが、妊娠している妻を離婚した男と結婚したと、そのキャスターの女性が画面に出るたびに非難した。しまいには「こういう女の顔も見たくない」と他のチャンネルに変えてしまうのだった。その度に私は非難されるのはキャスターではなく、妊娠している妻を捨てた男を非難すべきだというのだが母は聞きいれなかった。母の家族観は子供第一主義であり、離婚は子供にとって最大の不幸だから絶対するべきでない、という考えだ。私は人にはそれぞれに個性と事情があり、百件の離婚があれば百件の違った背景があるという考えなのでいつも母に反撥していた。今から思うと母は潜在意識で離婚願望があったのかもしれない。子供がいるので離婚は出来ないと思い込んでいたのだ。

現在いわれている家族の崩壊、離婚、子供の非行、家庭内暴力などの根元は何だろうか。抽象的な言い方になるが、結局愛情の不足、信頼と尊敬の念の欠如につきるのではないか。配偶者を愛せなくなった時、子供が可愛いくなくなった時、夫や妻や父親や母親を信頼できなくなった時、ある人は暴力を振るい、ある人は内に閉じこもり、ある人は精神的におかしくなり、ある人は平静を装いながらつらい日々を送って時が解決してくれるのを待つ。そういうものを超える大きな愛情、絶対の信頼がないものだろうか。

そこに宗教の出番がある。キリスト教は神の愛を説き、人間に対する絶対の信頼を訴える。仏教は不勉強でわからないが、悟りの境地に達して自己の葛藤を克服するのであろうか。でも私を含め信仰、信心深くない人は、迷い悩み、愛の不足、信頼の欠如に不安を持

つ。しかしこのごろ私は開き直ってしまった。それが人間の現実なのだ。そうやって生きていく事が大切なのだ。絵に描いたような幸福、安定はありえない。苦しみ悩みながら生きていく事が人間の人生なのだと。

人間も所詮動物なのだ。野生動物の姿を見て教えられる事がある。種の保存のために、雌を獲得するため激しく雄どうしが戦うゾウアザラシやライオン。美しい羽で雌を呼んでいる鳥。そして巣作りの懸命さ。子育て中の親鳥の姿は感動的だ。何回も何回も餌を巣に運ぶ。飽くことのない繰り返し。その度に大きな口を開けていっせいに餌をねだる雛。水鳥の親は雛を外敵から守るため身を挺して敵に立ち向かう。鳥の巣立ちの映像はいつもはらはらしながら見る。飛び立っていった時の潔さ、強さ。象の群れ。大きな迫力ある象の脚が柱のように林立している。その中にちいさなちいさな子象。母象の脚にぴったり寄り添って、さらに群れの大人というか大象というのか、に囲まれて守られて育っていく。大群が移動する中で小さな脚で必死に歩き遅れまいとする子象。鼻でやさしく子象を愛撫する母象。

人間も本来こうなのだ。ただひたすらに生きていくこと。食べて働いて身体が衰えて死んでいく。それが次の世代にも受け継がれて、次の人も同じように食べて働いて子を育てて死ぬ。一人はその最小の単位。つがいが次の単位。親子がまた一つの関係。それをひっくるめて家族。家族の集まりが社会。だから私も毎日働いて身体がぼろぼろに衰えるまで生きていく。それが人間として当たり前の事だと思う。

最後に言い訳。こんなまとまりのない、何を言いたいのかわからないような文でお茶を濁すのは恥ずかしい。本誌の質を貶める事になって申し訳ない。でもこれしか書けなかった自分というのもなさけないけど認めなくては、と諦めの境地で原稿を投函する。

気になる彼女

中島枝美子

やっぱり彼女が出てきた。こんな問題にまで彼女が顔を出すとは正直思わなかったが、私の人生のここ一番（といっても、何がここなのかよく分からないが）のときに必ず彼女は顔を出して、私を悩ませる。

彼女とは、私が小学校四年生の時に心臓発作で死んだ母のこと。

彼女が顔を出した一番初めは、私が初めて彼とセックスをしたとき。（学術的な『ｗｏｍａｎｓｐｉｒｉ

t』にのっけからこんな話で申し訳ないが）本当に唐突に彼女の顔が浮かんできた。といっても、母と共に暮らしたのは小学校一年生までで、その年の冬から彼女は心臓弁膜症という病気で入退院を繰り返したので、顔もはっきりとは覚えていないのに。兎に角あまりの唐突さに不可思議さを覚え、二十数年後の今でもはっきりとその事を覚えている。

二回目は、初めての子供を産んで三時間で死なせたときだ。出産後二か月ぐらい経ち家で泣いてばかりいても仕方がないので、気晴らしに三浦半島に行こうとして、私は総武線に乗っていた。錦糸町を過ぎて電車は地下に入り、私は車窓から暗い中後ろに流れていく壁を見ていた。すると、またまた彼女が現れた。今度は私に顔を見せるのではなく、直接私の頭の中に現われて、「もしかして、私の『結』（三時間でも生きていたのだからと名前をつけて、出生届と死亡届を同時に出した）は、彼女があの世で寂しいからと連れて行ってしまったのだろうか」と私に思わせた。ここでも、どうして彼女が出てきたのか分からなかったけれど、それ以上彼女のことを考えるのが怖かったので、一目散に私は逃げてしまった。

その後三～四年、私はずっと『哀しみａｎｄ半分死んだ』モードでいたのだが、ある日「あれ、もしかして私も何時か死ぬんだよね。」と、三十才を過ぎて気が付いた。と同時に、「母との関係を何とかしておかなくては、死ぬとききっと怖くて苦しむぞ」と思い、本当に焦ってしまった。

私は彼女が怖かった。ずーとずーと怖かった。

私の記憶の中の彼女は…

小さいとき夜中にお手洗いに起きたら、彼女は電気スタンドを前に難しい顔をして本を読んでいた。父から「神経質でなかなか寝つけないので、本を読んでいる。難しい奴だ」と否定的な感じで話を聞いた。それ故か、何だか近寄りがたいという印象が残った。病院の中での彼女は、疲れた顔をしてベッドに座っていた。二～三日自宅に帰れたとき、ぜいぜい苦しそうに肩で息をしながら歩いていた彼女。近づくと怒られそうで、近寄れなかった。

彼女の最期のとき。私は幸か不幸か父と二人病室にいた。「ウッー」という声と共に、胸の当りを抑えながら苦しげな顔で天井を見上げる彼女。ナースコールを押しても返事がないので、慌てた父は中庭を隔てて向かいにある看護婦さんの詰め所に向かって、大声で叫んでいた。周囲のざわめき。張り詰めた空気としばらく後の弛緩。何もかもが、十歳の私の頭の上での出来事だった。

棺の中の彼女は菊の花に囲まれて、でもやっぱり怖

かった。今度は、母としての怖さの上に、死人の不気味さが加わって、私は足が竦んでいた。それでも子供なりに悟ったのだ。「人間って案外あっけなく死ぬし、死ぬときは絶対的に独りなんだ。だから生きているときも独りでしかない」と（でもこの悟りは、三度目の彼女の出現で、本当には悟っていなかったことに苦しみながら気が付いた。）

一連の葬儀の後、祖母から母は仏壇の中に入ったと聞かされ、ますます怖くなった。何故って、幼い頃から何か悪いことをすると、「仏壇の中で仏様やご先祖様が見ていて、悪いことをするとバチが当るのだ」と言われていたから。（この点に関しては、宗教、特に仏教を知るようになり、仏教には人に審判を与えてバチをあてるというような考え方のないことが分かり、少しは彼女の呪縛から逃れられた。ホッ！）

何れにしろ、これでトドめ。もともと近寄りがたい母が、死ぬことで不気味な存在になったのに、その上仏壇の中に入って私の行動を見張っていて審判を下すのだ。非力な子供は囚われながらも、出来る範囲で逃げるしかない。ここから、悪循環が始まった。父は「死んだ者に何をしたって無駄。生きているものの方が大事だ」という態度で私に母の供養（？）を強制はしなかった。しかし、祖母を筆頭に親戚やその他の人々が、「御仏壇に手を合わせなさい。思い出してあげないと、お母さんが悲しがっているよ」と責めてきた。私は「嫌だよ。お母ちゃんは怖くて嫌いだもん」と、産んでくれた母を嫌うなんて許されるのだろうかと迷いつつも呟いていた。だから、仏壇には出来るだけ近づかない。でも心の奥の奥で、「怒っているだろうな。思い出すことすら怖がっているのだから」「どうしよう。でも仏壇に手を合わすと、母を嫌っているということが母にばれそうで、それも怖い」「でもこんなことしていると、必ずバチを当てられるな」「あー、だめ。ますます怖いよ」と思いながら、暮らしてきた。

こんな思いを心の底に抱いていたのだが、二度目のこの時はもう向かっていくしかないかなと観念し始めた。ところが不思議なことに、そう思い始めた頃私は『哀しみａｎｄ半分死んだ』モードから何故か抜け出て、私にもとりあえず明日が来ることを信じられる様になっていた。すると、またまた目の前に道が開け、私は何の迷いもなく、脱兎のごとく逃げていた。

そうして母の事をすっかり忘れた頃、私が私である、その根本のところで、彼女に支配されている私がいることに気付かされた。それは、母と私と私の子供という血縁的な縦の関係の中ではなく、水平な関係である「夫婦」の関係、その危機に直面する中でである。二十

年来一緒に暮らしてきた彼との関係が崩壊寸前であることは、前号に書いた。彼から告白（？）を受けた瞬間、私は私と外の世界を隔てている境界線がなくなり、自分が外の世界に溶けていくという不思議な感覚に見舞われた。言葉でどう表現したらその感覚を言い当てられるのかよく分からないが、「人格の崩壊」という言葉が頭の中に浮かんだ。その次に、私は彼の着物の端を掴みどこまでもついて歩きたい衝動に駆られ始めた。幼子が、母のエプロンの端をもって、どこへ行くにも不安げにくっついている感覚と似ている。幼子は母から離れても、戻ってきたらまた優しく迎えてくれるという確信が持てた時、初めて母の側を離れられる。私も同じ。少しでも彼から離れたらもう受け入れて貰えないような気がして、気持ちの上では全然離れられない。しかし、私は大人だ。食べるための仕事はあるし二人の子供の母としての仕事もある。彼女と会って来たであろう彼を見ながら、一人置き去りにされたという感覚が私を悩ませた。せっぱ詰まった気持ちはどんどん高じて、死ぬことが全然恐くなくなって、実際少し試してみた。でも、僅かに残っていた冷静な私が、「これは危機的な状態だ。なんとかしないと、ヤバイことになるぞ」と叫んでいた。今思い出しても苦しい、そんなせめぎ合いをしばらくして、気が付いたら私はカウンセリングのお世話になっていた。（私の出会ったカウンセラーは私にとっては救いの神。彼女によって私は自分の抱えている問題を少しづつ明確に捉えられるようになり、結果ここにこうして書けているのだ。出会いに感謝！）

二～三回カウンセリングを受けて、少し落ち着いたかなと思った頃、私は愛犬の散歩の途中で泣いていた。彼から色々言われ混乱していたその頃の私は、しょっちゅう散歩の途中で泣いてはいたが、その時ははっきりと「置いてきぼりは嫌なんだよ。いつも、いつも置いてきぼりだったんだよ。ずーとそうだったんだよ」と心が勝手に叫んでいた。「えっ？『いつもいつも』って、一体何時のことを言っているのよ」と、もう一人の冷静な私が尋ねている。「子供の頃の自分に出会っ」たのだ。本では読んだことがあったけれど、自分にも起ったのだ。ちょっと信じがたかった。

そんな不思議な経験をした二～三日後、彼も子供も皆それぞれの用事でいなくなり、私は家にひとりぽつんと残された。すると、突然子供の私が顔を出し、「いつもいつも、一人ぼっち。抱いてほしかったんだよ。怖いお母さんではなく、優しいお母さんに抱いてもらいたかったんだよ」と泣いていた。本当にさめざめと泣いていた。

子供時代の私は、小学校一年生からずーと一人ぼっ

ち。母が入院していた三年間、父は生活のための仕事と母の看病で忙しく、一人っ子の私は隣の家や近くの親戚を一人で泊り歩いていた。母が死んでから父は「娘が可哀想」という周りの勧めもあって、一年後に祖母が紹介してくれた女性と結婚した。経済力のない私の母にウンザリしていたのか、父はずーと働き続ける女の人と結婚した。それが、今の母。彼女は子供が出来ても、私たち父子とは一緒に住まないで、電車で一時間ほどかかる実家から仕事に行った。だから、私はやっぱり独り。帰りの遅い父とは夕飯も一緒にとれないことが多く、ほとんどの時間を一人で過ごしていた。その時は、「人間死ぬときは独りなんだから、平気平気」と思っていた。今思えば「不幸な生い立ちにもかかわらず、親に心配をかけない立派な子供」を懸命に演じていたのだ。そういえば彼と暮らしはじめた頃、彼が私より遅く帰ってくる日がずーと続いたとき、「なんでこんなに遅いのよ。一緒に暮らしはじめたんだから、電気のついている部屋に帰りたい！」と言って、大ゲンカになったことがあった。子供はどんなに過酷なことでも（私よりもっと過酷な子供時代を過ごした人もいるはずだが、傷ついた子供を大人の自分が癒そうとするときは、客観的に「過酷さ比べ」をする意味はなく主観的に思えばそれが大切なんだと、最近分かった）受け入れるしかないから、子供の私は健気に受け入れていたけど、心の奥でものすごく傷ついていたんだ、とやっと気が付いた。人はあまりに深く傷つくと、傷ついたことすら忘れてしまうんだ。

私はどうすればいいのか。子供時代に戻って、想像の中で母に思いっ切り甘えればいいのだと、理屈では分かりかけた。でも戸惑いが強い。母は受け入れてくれるだろうか。そもそも、母は私のことを好きだったのだろうか。私は、母から愛される存在だったのだろうか。母から叱られた記憶はおぼろげながらあっても、褒められたり抱きしめられたりした記憶はない。私が彼女のことを怖がっていたから、仕方ないのかな。やっぱり彼女は怖くて、嫌いだ。考えてくると、母に甘えたいという私の気持ちは萎えてくる。感情が頭についていかなくて、益々混沌の中に落ちていく。

愛されたという自覚の薄い者は、人を愛するということがどういうことか分からない。

彼との関係がこじれて約一年。苦しみながらも見えてきたのは、他の女性と関係を持つという非常手段を用いて、彼は私との抑圧的な関係から逃れようとしたのだということ。考えて見れば二人の関係はそれを目指したわけではないが、徹底して「私支配する人、あなたされる人」だった。彼は私の要求を、時々プッツンしながらも、殆ど受け入れてくれた。だから、私は

彼と暮らしていたのではなく、私と暮らしていたのだ。私は自分とは違う他者と生活することがどういうことなのか、皆目分かっていなかった。父は母の分も私を愛さなければと考えたのか、私の要求は何でもきいてくれた。結果私は父を支配したのだが、それと同じことを彼にもしたのだ。その上、私の要求の殆どは「男女平等」という衣を着ていたので、歪んだ関係はなかなか本当の姿を現さなかった。

たとえば、夜の外出。ある月私が二回したとすると、彼も二回まではいいがそれ以上は許さなかった。「どうしてあなたは三回なの。夜いないと一人残る方は大変なのだから、あなたもセーブしてよ。付き合いに男も女も関係ないわよ」と強く主張した。勿論その時の私の意識の中には許す・許さないなんてなかったけれど、きっと私は「男女平等」を錦の御旗にしてとても威圧的だったのだろう。

家事分担もフィフティーフィフティー。彼が疲れてフーフー言いながら家事をこなしていても、「時間の観念がないんだから。計画性がないからこうなるのよ。結局怠慢なのよね」と彼を攻撃した。また、「ここで手を出すと、平等原則が崩れていく。男を甘やかしてはいけない（この点は、半分正しい？と今も思っているが）」という思いに支配され、決して手伝おうとしなかった。確かに彼はのんびりしていて約束の時間は守れない。が、彼を変えようとしても無理。それが彼なんだから、大切なのはそんな彼と私はどう付き合っていくかなのだと、カウンセリングを受ける中で思えるようになった。疲れていて大変そうなら、そして自分が手伝えるなら手伝えばいい。手伝ってもらう状況に彼が甘えてくるようならその時、理屈を言えばいいのだ。こんなことを毎日積み重ねて、私は彼への支配を強めていった。相手への思いやりのないところで、理念だけが突出していったのだが、拙いことに彼も「平等原則」にとらわれていた。「彼女の言うことは正しいから、自分は気持ちの上では納得出来なくても、それは男の傲慢さだ。気持ちを捩じ伏せてもやっていくべきなんだ」と思っていたのではないだろうか。従って、二人共が「私たちは先進的なカップルなんだ」という錯覚の下にいて、二人の関係の問題点がなかなか見えて来なかった。

こんな関係に成り下がってしまった原因は、二人それぞれにあった。私の方は、前述の父との関係を彼との関係に持ち込んでしまった以外に、一人で過ごす時間が多かった分、家族という親密な関係がどういうものか、よく分かっていなかった。だから、一緒に生活すればそれで終わり。家族の気持ちを考えたり、自分の気持ちより家族の気持ちを優先することも必要だということが、感覚的に習得できていなかった。人を愛

するとは、日常レベルでのそんな「些細に見えること」の積み重ねかもしれないのに。だから私は、一緒に暮らしながら、彼が私との関係に嫌気がさし表情が曇っていったことに全然気が付かなかったのだ。身近な人の気持ちに疎すぎる私。

彼の方は、完璧な専業主婦、即ち自分の都合より家族の都合を常に優先する母に育てられたのだが、その母の態度をしっかりと受け継いだ。それ故、周りの人の気持ちは手に取るように分かるのだが、その分自分の気持ちを抑えてしまう。特に家族のような親密な関係では、常に相手の気持ちを優先していた。そうして、相手の気持ちを優先するうちに、みずみずしいはずの自分の気持ちが掴めなくなったようだ。だから、彼は自分の感情をストレートに言葉で表現することは少なく、必ず「理論や理屈」というオブラートに包んでくる。周りの人の気持ちは十分すぎるほど分かるが自分の気持ちが掴めない彼と、自分の気持ちははっきり言えるが周囲の気持ちなど考えたことのない私。凸と凹がしっかり嵌まってここ迄来たのだ。

子供との関係での問題も見えてきた。私は今もって、自分の子供をどうしたら愛していることになるのかよく分からない。膝の上に乗りたがる小学生だった娘を、母だからやらなくっちゃと膝の上には乗せるのだが、しばらくすると体が「嫌だはやくおろせ」と要求してくる。「だめ、スキンシップは子供にとっては必要なんだから」「でも、膝の上にのせたくない。ぎゅっと抱きしめたくないんだ。早く子供をはなせよ」ともう一人の私が、譲らない。頭で抑え込んでも、体が拒否するのだ。なぜそうなるのか。母に抱きしめられていないという怨みがそうさせるのか、今の私には分からない。子供たちには悪いと思いながらも、そうして来てしまった。

三度目の彼女の出現は、私に多くのことを気付かせてくれた。癒されないまま立ち止まっている子供の私がいること・母から愛されていなかったのではという哀しみ・彼を愛してはいなかったという後悔・子供を愛し育てることへの戸惑いなど、など。

私が育ってきた家族と二十年かけて築いてきた家族、彼女はその両方を自在に行き来しながら、四度目・五度目の出現を手具すね引いて待っているのだろうか。彼女への未解決の気持ちを抱きながら、これからも私はおたおたと、彼女の御相手をすることになるのだろう。彼女への私の捩じれた気持ちはまだまだ解けない。和解への道はうっすらと見えてはきたが、とても遠い。でも、とにかく何度でも彼女とぶつかる中でしか、彼女の呪縛を解き放ち、私なりの物語を紡ぐことは出来ないのだろう。今はそう思っている。

性と国家
加害の国で被害者として
生きるとはどういうことか

李（イ）　文子（ムンジャ）

李文子と申します。十周年記念ということで、何はともあれ、十年間続けるというのは大変なことだと思っています。とくに日本の中にあって、宗教と性と国家との関わりで、地味な活動を続けていらしたご苦労は大変なものだったでしょう。

私がここでお話ししたいテーマは二つあります。一つは慰安婦にさせられてやむなく日本に住むに至った同胞女性の宋神道さんについて。そして宋さんと知り合ってから突きつけられたトラウマの深刻さのことです。どのように「性の軍隊奴隷」にさせられていったのかとか、歴史的あるいは事実的経過、または裁判に関するものも出版されておりますので、そのことは割愛させていただきます。このトラウマのことは私は素人ですので、捉え方が正しいのかどうかまったくわかりません。もし専門家の方がいらっしゃればアドバイスをお願いいたします。

二つ目は私が日本に生まれ、日本の文部省の教育を受け、育まれ、蔑まれ、五十有余年を日々生活していくなかで私たち在日の人権が無視され、人間としての尊厳を保ちながら生き続けていくことの難しさ、そういう状況のなかに置かれて生きてこざるを得なかった宋さんと在日の五十有余年の根本的な問題は何一つきちっと解決されてこなかったということではないでしょうか。

宋神道さんと関わるようになって四年になります。忘れもしません。一番はじめに彼女と出会ったのは、裁判を始める前に〈従軍慰安婦一一〇番〉というボランティアのみなさんと電話で情報を受けることにしました。いろいろな元軍人からの情報がありました。「今隠れて公衆電話からかけている。家族には内緒で」といった電話や、脅迫まがいの電話もありました。いろいろな情報があるなかで、ある朝鮮人団体の人から「僕の知っている在日で、慰安婦にさせられた人がいるよ」という電話が入ったんです。それで、〈一一〇番〉を締め切るときにどうしようかということになって、結論を出すまでオフレコにしておこうということになりました。それから暫くして、まず訪ねて行ってお話を聞こうということで、在日の女性と〈一一〇番〉に関わった川田さんが訪ねて行くんです。

その前に〈従軍慰安婦問題ウリヨソンネットワーク〉というのができていました。その代表が一人で宋さん

の家を訪ねていって話を聞いてきたんですが、一度東京に呼んでお話を聞きたいということになって、十数人が集まって宋さんのお話を聞きました。その時初めて私は彼女に会ったんです。

本人が裁判をしたいということになったので、では裁判を支えましょうと。でも私は「支える」というのは「私は支える人、あなたは支えられる人」みたいなのがあって嫌いなので、どちらかというと、「一緒にやりましょう」というのがいいと思ったんですが、わかりやすいということで「支える会」になりました。

そうこうしているうちに、お正月になりました。彼女の話を聞いてみると、戦前中国に十七歳のときに騙されて行きました。要するに彼女は親に結婚させられるんですが、初夜のときに逃げて来るんです。それで、家にも帰れずにいた時に官憲に自立して働いて食べていけるところがあるからと言われて連れて行かれたんです。気がついてみると、中国だったんです。十七歳のときから慰安婦として慰安所に七年間押し込められていました。中国の中心部を転々と七年間も慰安婦をさせられたんです。その七年間で彼女は子どもを四回産んでいます。一度は死産をしています。最初の子どもは彼女の言葉を借りると、「おら子どもで何にもわからねえから、腹の大きくなったのも妊娠もわからなかった」そうです。「でも七ヶ月くらいたつと、腹はでかくなるし、腹の中でなにかゴソゴソ動くべし。おらもどうしていいかわからねえ」と。しかし七ヶ月くらいで死産していたらしいんです。それで、「腹は冷たくなってくるべし、痛んでくるべしで、どうしていいかわからねえ。それでも兵隊はとれ、と言うし。ほんとうにどうしていいかわからねえ。」「しょうがないから鏡をあてて、どんぶり飯かっくらって、手を突っ込んでみた。」そうしたら、片一方に触るものがあって、そうっと引っぱって見たら、どうも足らしい。逆子だったんですね。「こりゃ、片方の足だけ引っぱったらまずいと思って、もう一回どんぶり飯かっくらって、もう一回手を入れてみたら、今度は足を二本つかむことができた。」それで、静かに静かに引っぱり出したら、「出てきたのが、血の塊が紫色になってな。それに冬だったべ。おら何も弔ってやることもできねえし、ボロ布かぶせてな、寒い凍っている所に埋めに行ったんだけど」というのが最初の妊娠なんです。

それから二度目、三度目は正常に産んだんです。その子どもはどうしたかというと、二度目の子どもは中国人に預けています。「慰安所生活してるのに、どうして子どもなんか育てられる？乳だってやれるわけねえべ？慰安所の主人は明日から兵隊とれっていうべし。」三人目の子どもは朝鮮人に里子に出したんです。ちょうど私たちが宋さんと出会った頃、中国残留孤児の写

真がＮＨＫなどでたくさん報道されました。宋さんはそれを食い入るように見るんですよ。そしてため息をつきながら、自分のくれてやった子の面影を探しているんですね。

私は一月二日に宋さんが一人で正月を過ごしていることにはっと気がついて、その頃は福祉に頼って生活してますから宋さんのところには電話がありませんでした。それで、住所だけを頼りに、朝鮮の正月料理をちょっと用意して、訪ねていったんです。たまたま家にいてテレビを見ていましたが、耳がよく聞こえないんです。というのは、慰安所時代に言葉が分からないと言ってひっぱたかれ、言うことをきかないと言ってひっぱたかれて、結局片方の耳の鼓膜が破れてしまって聞こえないんです。

東京で話を聞いたときに会っていましたが、このときが個人的に会った最初でした。とにかく私が一番驚いたのは、七年間の生活で彼女の価値観が全部埋められていること、それからその七年間と戦後の五十年間の日本の生活のなかで人間回復ができなかったということです。たとえば言葉一つとっても、「おめえ、てめえ、ばかやろう」という感じなんです。というのも、彼女は十七歳まで日本語を知らなかったわけです。日本語を覚えたのは慰安所でした。兵隊が使う言葉そのままなんです。そのように生きてきたんです。四年間つきあってきて少しは人間を信頼してくれたかなと思うんですが、まだまだ道は遠いですね。

初めはとにかく「お前たち何しに来てるんだ。おらは金も何にもねえのに、おらを騙そうとしてきてるのか」などと言われました。結局、彼女は七年間の慰安所の生活のなかで一番しんどいだろうと思うのは、日本の軍人のもっていた旧植民地の韓国・朝鮮人を見る目で、彼女が自分自身を見ているということなんです。これはすごいことだと思いました。日本の軍人の蔑視した朝鮮人観で彼女自身のアイデンティティを見ているわけです。これは韓国やフィリピンの被害者とは違う厳然とした事実です。加害者の国で自分たちが犯した加害の事実をはっきりと分かっていない人びとの間で五十年間暮らしたということなんです。

するとどういうことが起こるか。彼女は慰安婦にさせられたことを隠していなかったんです。隠さなかったのは、お国のために同じ戦争に引っぱって行かれながら、日本人は恩給やなにかをもらっていい暮らしをしてる。それなのに自分は福祉をもらっていることで、白い目で見られる。なぜ自分にも当然の権利として恩給をくれないのか、と思ったからです。

戦後彼女は中国に置き去りにされようとしたときに、現地で除隊になった日本の軍人にプロポーズされるん

です。彼女は迷ったんですが、今さら国に帰れるわけでもないし、その人について日本に来るんです。それを聞くたびに胸が切なくなるんですけど、彼女にとって初めての選択だったのが、裏切られるんですね。敗戦前に除隊になっているということは自分で食って行かなくてはならないんです。宋さんは、兵隊が討伐に行って殺した中国人から奪った指輪や時計を、兵隊からプレゼントされていくつか持っていたんですが、その軍人はそれが目当てだったんでしょう。帰国するのに船に乗らなくてはいけないけれど、お金がない。それで、宋さんを利用したんだと思うんです。宋さんを騙して連れてきた男はその後婦女暴行・強姦殺人罪で死刑になっています。

日本に上陸したところで、宋さんはおにぎり三つ持たされて捨てられるんです。彼女は右も左も分からないでしょう。その時彼女は彼の子どもを身ごもっているんです。それで彼女は悲しくなって汽車から飛び降りて自殺しようとするのですが、さすがに怖くなって思いとどまります。駅員が旅館に泊めてくれて、その旅館に偶然、在日朝鮮人の男の行商人がいて、仙台の方の飯場にいる自分の友人がひとりくらいなら面倒見てくれるかもしれないと、親切に連れていってくれたんです。この在日の男性と戦後一緒に生活するんですが、性の交渉は一度もないんです。どうして?と聞くと、「嫌なものは嫌だ」と言います。私は性に関する、自然の感情にまかせられない一つのトラウマではなかったのかと思います。

十三年前から彼女はずっと一人で生活しています。もちろん子どももいません。その生活に対して、朝鮮人でありながらお上の世話になっている、それなのにタクシーに乗っている、ぜいたくだ、などと言われ続けています。食が細いので、たまに栄養のある美味しいものを買ったりすると、近所から福祉をもらっていながらそんな贅沢な物を食べるなとも言われます。「おらは一度日本人になったのに、外人登録をして、四年に一度指紋を押して、写真を撮られて、なんや!」と宋さんは区役所の机をひっくり返したことがあると言います。彼女はそうしないと生きてこれなかったんですね。温かい言葉一つかけてもらえなかったんですよ。私が宋さんのところに行って一緒に散歩すると、「なあ、見てみろ、こいつもな戦争に行ってな。恩給もらってこんな立派な家建てて、見てみれ」というのがあちこちにあるんです。宋さんは家族も持てなかった。子どもも持てなかった。そして七万円の保護をもらって生きているんです。借家で罵声を浴びせられながら。

加害の国で一般の人びとに加害者であったという意識がないなかで被害者が五十年間生きてきたというのは地獄のようです。それだけでなく、彼女はアイデン

ティティが持てなくなっています。朝鮮人の悪口を言うし、朝鮮人には日本人の悪口を言います。たとえば、私には「李や、日本人の言うことを信用しちゃなんねえぞ。おらは七年間の慰安所生活で嫌というほど日本人の腹黒いのを見てきているから」と言います。そして日本人の支援者には「おら、あんな朝鮮人大嫌いだ。チマ・チョゴリも嫌いだ。朝鮮人は頭が悪い。辛いものばかり食うから頭いいのは一人もいない」と言います。

このすさまじさ。私などが本当に悲しくなるのは、韓国の元慰安婦にされた人は被害者として被害を受けた国に住んでいるのですが、宋さんは違いますね。心の安まるときがなかった。被害者が民族差別をされ、抑圧され、蔑まれ、つまはじきにされ、加害者は何も問われない豊かな日本という国はなんなんでしょうね。

支える会ができてから、たくさんの人との出会いがあるのですが、私から見て非常に不思議だと思うことがあるんですよ。それは宋さんが何をやっても、言っても、何も言わないし、言えないのです。とても耐えられないようなことがあっても、何も言わない。宋さんは戦後生計を立てるために三流のような場末の船乗り相手の飲み屋でホステスをしてるんです。夫だった人は体が弱くて、ニコヨンをしてましたがあまり働けなかったらしいのです。そのようなところで得た男に対する価値観が彼女の言動に出てくる。たとえば男の人と会うと、男性器を「ぱん」と触ります。でも触られた男の人たちの中で抗議する人は一人もいませんでした。女の人を見ると乳房を触るんです。それで、「おめえでかいなあ」とか、「小さいなあ」とか言うんです。でもだれも抗議しないんです。私がなぜ怒らないのかと聞くと、「やっぱり日本人としてそこまで言えないよ」という答えが返って来るんです。私はそういう関わり方は対等じゃないと思います。

地方の人たちから「ばばあ、慰安婦にさせられてあそこがばがばなんだろう」とか、老人会などで軍人だった夫が数年前になくなった女性から「おめえ、戦地でおらのじいさんとやったんじゃねえか」などと言われたりしています。テレビのニュースなどで南北朝鮮の問題が出ると、「今度戦争が起こったら朝鮮人なんか容赦しねえで皆殺しにする」と宋さんに面と向かって言う人もいるんですよ。

そういう人たちと宋さんがいけないことをしたときにきちんと言うべきことを言わない日本人とは、ある意味で共通しているところがあるのではないかと思うんです。私はいけないことはいけないときちんと言ってもらいたいと思っています。

私は宋さんとはものすごく喧嘩します。彼女の持っているエネルギーはものすごいんですよ。エネルギー

がなかったら、生きてこれなかったんです。タクシーに乗っても、「おい、まっすぐ行け」というような言い方をします。いろいろ言われるのが嫌なので、彼女の方からけん制球を投げているんです。東北のその地域ではそういう人間関係でしか生きてこれなかったんです。

戦後五十年間、こうした加害の国で被害者が生きてきたということは、彼女のトラウマが癒やされていかないのではないか。彼女は慰安所でそれをやられたんですね。五十何年生きてきてどうしてこういう行動をするんだろうなあ。私が一人の人間に対してここまで深く考えたのは初めてです。

私が当たり前のことを当たり前にして欲しい、それは私の尊厳を冒しているから止めて欲しいと言うと、ものすごい反発がかえって来るんです。それで思い当たったのは、彼女にとって、何かをしろ、と言われた時はすべて不利益だったわけです。慰安所生活にしろ、日本での生活にしろ、こうした方がいいということは彼女にとっての不利益だったんです。だから、彼女にとっては人の話をそれが自分のために言ってくれているなんて思いもよらないわけです。

そのように四年間いろいろなことがありました。最近宋さんは「おら変わったか」と聞くので、「変わったよ。だって、こうしてハルモニと話ができるじゃない」「そうだよなあ。おらも悪いとこいっぱいあったからなあ」と言うようになったんです。

一月二日に宋さんの家に行ったとき、思いつく物をいっぱい持っていったんですが、その中に電気毛布を入れていったんです。行ってみたら、やはり湯たんぽを入れて寝ていました。電気毛布は暖かいからと言っても、「焼け死ぬからいらねえ」と言うんです。「焼け死ぬ心配はないから大丈夫だよ。私が見ていてあげるから」と言うと、安心して寝るんです。朝、なにかの気配で目覚めてみると、枕元で宋さんが手を合わせているんです。私は生き仏になってしまったのかなと思ったんですけど、こういうことだったんです。今まで湯たんぽを使っていて夜中に三、四回も小便で起きたんだけど、電気毛布を使ったら二回しか起きなかった、それでぐっすり眠れてありがたかったということでした。

ちょっと話が飛びますが、私は今、地元でいろいろなことをやっています。たとえば、指紋押捺のことをやっていますし、この間三年がかりで区の教育委員会に学校の先生のための「在日韓国・朝鮮人に対する教育指導資料」というのを作ってもらいました。

外登法というのがありますね。これは三十六年間の植民地時代は日本人にさせられ、一九四七年五月の日

本国憲法発令の一日前に天皇最後の勅令で、日本国籍のまま、当分の間外国人とみなすという見なし法案で私たちはまた朝鮮人に戻されたんです。憲法の発令される一日前ていうのは、憲法の保障する基本的人権の枠外に私たち在日韓国・朝鮮人や中国人、台湾人を追い出してしまったということです。指紋押捺はなくなりましたが、家族登録を導入しました。この家族登録は戸籍と同じです。戸籍は大和朝廷時代に天皇を奉る者として戸内と戸外と官民と賤民とに分けていったんです。そこから一目見たら分かるようになったので、家名を汚すとかいうことが出てきたんですね。この戸籍が監視するのにとても便利だということで、ヒトラー政権が導入しようとしたという話もあります。

戸籍というのは世界広しといえども日本が植民地の時に植え付けた台湾と朝鮮と、そして日本だけですね。この戸籍に代わるものとして家族登録にしたのです。そしてこれまで採取した指紋をどうしたかというと、今度は法務省が原票としてマイクロ化して保管しています。指紋押捺はなくなったというけれど、確かにこれから十六歳になる人は採られないけれど、これまで押した人は法務省が保管するということです。その上で、家族登録をするということなんです。ですからこれは二重三重の締め付けなんですよ。それに私たち当人は情報開示を請求しても原票を見せてもらうことができませんでした。法務局、公安関係はフリーパスで情報を入手できます。外登法の欄にどういうことが記載されているか、自分の情報であるにもかかわらず、見ることができなかったんです。それで、私はこの間区役所に行って、情報開示を請求しました。すると、法務省から情報開示した人のデータを示せというのがきたんです。

情報開示されたから見せて下さいと言って、役所の窓口に行く人はよほどこのことに関心を持っているか、在日の状況を何とかしたいと思っている人でしょう。そういう人の名前を挙げろと区役所に命令するのは完全に法務省のブラックリスト作りのためでしょう。これに墨田区ばかりでなく、東京都が応じたんです。荒川区では家族のデータまで報告しています。

私は区役所に行って私のことをどこまで法務省に言ったのかと聞いたら、生年月日、登録番号、国籍、現住所など全部報告しているんです。どれだけの人が開示請求をしたのかを知るのにそこまで必要でしょうか。大阪はそれを拒否して人数だけを挙げました。私は区役所になぜそういうことをしたのかと尋ねました。すると、機関委任事務だから事務的に挙げましたと言うんです。では日本人に置き換えて、もし被差別部落の人とか障害者が自分の戸籍を見せてくれと言って、その結果、法務省が情報を挙げろと言ったら、あなたは

どうしますかと聞くと、「いやあ、ケース・バイ・ケースでしょうね」と言うんです。

「日本人の場合、ケース・バイ・ケースということがすぐに頭に浮かぶのに、在日の場合には浮かばないってどういうこと？それこそ民族差別でしょ？」「いやあ、機関委任事務だから。」同じ機関委任事務でも大阪は拒否しているわけで、どうしてこうも違うのかと昨日区役所に行って来たんですけど。

もう一つよく見える問題で、実は私の娘は二四歳です。二〇歳になったときの成人式で通知が来ませんでした。通知が来る区もあるけれど、墨田区は来ないってわかってたんです。なぜかというと、祝祭日と言えども、日本国民の祝祭日法なんです。私たちは国民じゃないでしょう。墨田区の場合、祝祭日係りは文化振興課だと聞いたので、そこへ行って、娘の成人式の通知が来ない理由を聞かせて下さいと言いました。そうしたら、「毎年毎年相談させていただくんですが、今回も従来通りとさせていただきました」という返事でした。私が、相談する人のなかに在日の人はいるのかと聞くと、「いない」と言うのです。当事者なしで相談するのはおかしいのではないかと問うと、通知が届いてかえって迷惑がかかるかもしれないからと言うんです。相手の言っている意味が分からなかったのですが、通称名を名乗っている人がいる場合に通知が届いたら迷惑になるかもしれないということだったんです。いらないと言っている外国人登録法の時には通知は来るんですよ。それで、それはどういうことなのかと言うと、それは自分たちの管轄ではないと言って逃げるのです。そこで私は「権利の時は日本国民ではないということではじかれて、義務の時は住民ということで税金をとられています。権利が少ない分、税金を少なく払ってもいいですか」と聞きました。「いやあ、それは私たちの担当と違います」と言うので、「あなた方の担当は違うかもしれないけど、私は一人ですよ。どこへ行っても私は私ですよ」と言ったんです。

成人式の通知が来たとしても参加するとは限りません。なぜかというと、日の丸を揚げるからです。私自身は日の丸のデザインは簡単で嫌いではないんですが、歴史を共有してないでしょう。加害は加害、被害は被害で、どのような加害をしたか、どんな風に被害を受けたかという歴史の共同作業がなされていないわけです。ドイツは国旗を変えましたね。それから国歌も二番からしか歌わなくなりました。ドイツがオーストリアを併合した後、戦後みなし法案で「外国人と見なす」なんてことはしなかったんです。オーストリア国民に戻るのもドイツ国民になるのも自由に選択させたんです。日本はこれをしなかった。「当分の間外国人と見な

す」として五〇何年も来ているわけです。そして外国人登録でしょ。日本の国民でないということで、はじいているわけです。その上に家族登録をして。

そういうところで宋さんが生きて行かざるを得ないという現実が続いている。民族差別があるし、戦後の歴史を共有できない地獄のような所で生きています。私たちには発言する言葉があるし、字も読めます。宋さんにはそれは無理でしょう。そういう状態が綿々と続いているということを言いたかったんです。

（これは一九九六年に行われたフェミニズム・宗教・平和の会十周年記念シンポジウムでパネリストの一人、李文子さんが話して下さった講演の記録です。シンポジウムの報告書としてまとめるはずでしたが、諸般の事情があって、実現しませんでした。李文子さんのお話だけでも記録に残して欲しいという声もありましたし、多くの方に読んでいただく意味は大きいと考え、遅ればせながら、このようなかたちで収録することにしました。なお、テープおこしは田光礼さんがしてくださいました。）

女と国家―観念による呪縛
A 『古事記』（二一）

河野　信子

若い女　三輪山伝説に、もうしばらくこだわらせて下さいませ。『日本書記』では、モモソヒメのもとに訪れる「神」は、蛇体を仮りの姿とした三輪山の神であったとなっています。この事を知ったモモソヒメは、深く恥じて、自死すると書かれています。何に恥じたのかは、きわめて紛らわしく、「神」に「正体をあらわせ」といったことを恥じたのか、蛇といった異類婚を恥じたのかわかりません。現代の学者達は、蛇の再生力と霊力への畏怖のほうに傾いているようですが。三輪山の神は蛇であるといったりして。

老婆　そのまぎらわしさこそ、神話を民間宗教に導入する前段階のためらいを示しているのではないでしょうか。説話を宗教家が布教の材料として使うとき、気味悪がらせたり致しますので、中世には、あの『血盆経』が広まったりいたしましたでしょう。

そこまで不気味なものを、あからさまに表現することは、『日本書記』の編者たちも、さすがにためらいがあったのではないでしょうか。さて、『古事記』のほうに行きましょうか。

若い女　はい、『古事記』では、三輪山伝説は、モモソヒメのように自殺したりなどせずに、活玉依毘女(イクタマヨリビメ)のもとに通ってくる男の物語となっています。ここでイクタマヨリビメは妊娠いたします。神の子、オホタタネコが生まれます。のちに大物主神を祀る神主となります。

老　婆　このオホタタネコの出自は『古事記』では、やたら、ややこしくなっています。「僕(あ)は大物主の大神、陶津耳(すえつ)の命の女、活玉依毘女を娶ひて生ませる子、名は櫛御方(くしみ)の命の子、飯肩巣見命の子、建甕槌(たけみかづち)の子、僕意富多多泥(おおたたねこ)ぞ」となっていますでしょう。今の表現法とはだいぶ異なっています。先祖を並べて、…命の子といっているわけですから。なぜか、私には、神器(神前に備える)づくり一族の子といっているように聞こえてなりません。神器を作るということは、神官の仕事でありました。後の世のように「創る人、供える人、祭る人」が分化していってはいません。一族自体が「聖別されるべき」部族となっておりましたのでしょうか。あら話が、陶器づくりやカメ作りに傾いてしまいました。どうも、現世を生きた人々のほうに思いが行ってしまいますので…。通ってくる男のほうに話を戻しましょう。『古事記』では、衣の裾に赤い糸を通されて、鉤穴より抜け出て、美和山(三輪山)へ行くとなっているだけでございます。学者様は、こんなことができるのは蛇だろうから、などとおっしゃいますが、稗田阿礼は「蛇」だといい切ってはいません。また、聞き手であり表現者でもあった太安万呂(現代の「聞き書き」よりは、はるかに強く、深く全身で聞き、文字表現にもっていった。持統・元明・元正といった女帝たちの前で阿礼は語り、その語り口は、歌詠みの歌のようであったであろうと考えたい。)も「蛇」だなどとは書いていません。霊も物もすべて「もの」ですから、気配物質が男になったと、考えてもいいのではないでしょうか。

若い女　「ものの気」＝「物の怪」でもいいわけでしょう。しかし、自然界の事物に重ねなければ気がすまぬのも、神話から神を遠ざけていく道筋かもわかりません。さきほど、神器創り部の一族の創世譚のようだとおっしゃいましたが、王権が介入してまいりますと、縁(へり)がぼやけてしまいます。次回は、もう少しロマンへの傾きを持った「語り」に移させて頂きます。

天理教と女性（第26号を読んで）

児玉佳與子

はなから私ごとで恐縮だが私は昨春、婦人科の手術（良性）のため、一旦天理大学教授職を退職し、幸い全快して以前より元気になったので、後期の女性論のみを非常勤講師として続けさせていただいている。前二六号には私も執筆を頼まれていたので、教祖誕生二百年記念のシンポジウムには、春も夏も出来うる限り出席させていただき、それなりの感慨を深くした。ところが住んでいる京都の、道一つ隔てた亡父の家（姑は廿三年前、舅は六年前に亡くなった）の解体・新築・引越が思ったより大変で、教職もあり、原稿がどうしても間に合わず、諦めてご挨拶状を奥田暁子さんに出したところ、前号の特集「天理教とフェミニズム」を読んでの感想という形ではいかがですかというお誘いをいただいた。

前号では、四月のシンポジウム「生命倫理・女性論・環境倫理」が、中島枝美子さんによって、また七月のシンポジウム「女性と宗教」が、金子珠理さんと勝又美保さんによって、かなりよくカバーされている。また、両シンポジウムの報告書が、このお二人の、まさに「特選」に値する懸賞論文を含め、三月に出版の予定だというので、私は正面切ってこれらシンポジウムについて書く必要はなくなった。ただこのお二人が触れなかった数点について、本当に断片的だが書きたいことを、まずは書かせていただきたい。（敬称略）

Ⅰ．「天理教　「教祖御誕生二〇〇年」記念国際シンポジウム'98」についての断想

一．七月十七～廿日の四日間の部のメインテーマは「女性と宗教」であったから、基調講演者ないしは発題者であった女性のみを挙げるとタチアナ・グリゴーリエヴァが「ロシア人のみた天理教教祖」（これは「直訳」で日本語のプログラムの題とは少し違うが詳細は報告書参照）を初日の公開講演会で、また「ロシア正教会における女性的ルーツについて」を十八日に講演。カレン・レバックスが「徳の諸相」につき十八日の午後に、チェリル・カーク・ダガンが「私たちの発言の機会を持って――女性、宗教、対話と対決」と題して十八日の午後に基調講演。同日午前に八木久美子が「現代イスラム世界における女性の立場」、午後に足羽與志子が「アジアの宗教と女性の「役割」」、堀内みどりが「ヒンヅー教の伝統と近代における女性の位置」について発題。十九日午前にビビアン・リー・ニトレイが「中国の思想と宗教における女性の未来」について基調講

演をした。午後からのパネルディスカッション『二十一世紀における世界の「女性と宗教」の位置』にパネリストとして女性で参加したのは、上述アメリカとロシアからの四人の学者だけで、あとは島薗進、松本滋、加地伸行の三人、それをコーディネートしたのが金容雲、村上元英両氏であった。ところが村上（千葉大学）教授は、外国の女性学者のことはタチアナ、カレン、チェリルといった具合にファーストネームで親しげに呼び、他方日本の教授のことは勿論、進、滋、伸行などとは呼ばない。アメリカを中心として「性差別的でない英語の使い方」についてガイドラインや辞書まで出しており、そこでは男女を同格の呼び方・書き方をしないといけない、例えばProf.(Mr.)Shimazonoならば、Prof.(Ms.)Grigoryevaと、少なくとも公式の席では呼ぶべきである、と私は心得ていた（注1）。そこでこの日の夕方催されたレセプションの席で、お酒に酔った（ふりをした）勢いで、村山先生にそのことを尋ねてみた。すると先生はカンラ・カンラと大笑い。「あなた、そんなことを言っていたら、国際社会で笑いものにされますよ」と。どちらが笑いものになるのか、まだ半信半疑だった私は、外国女性教授方に直接きいてみた。「あなたは会議の席上、ファーストネームで呼ばれたけれど、男の教授達はそうではなかったことに気がつかれましたか？気にはなさいませんでしたか？」すると「気はつきましたが気にはしておりません」というのが、礼儀正しい彼女達の答えだった。私がこのことをここに書かせていただく理由の一つは、彼女達はほとんど皆、れっきとした教授・博士・所長であって、さぞかし勉励刻苦の結晶であろうと思われる著書もたくさん書いておられるので、フルネームのスペルや読み方を銘記すれば、私達が著書を手にとって学び、敬意を表す機会も増えるだろうと思われるからである。男女の人間としての価値は平等であるから、取り扱い方も平等化されねばならないという考え方は、フェミニズムに限らず、今や国際的趨勢であって、それを無視して「慣行」をとられた男の先生は、幸い本学の先生ではなかったが、本学周辺で催された会議の記録にはけっして載らないであろう一つの女の視点としてここに記させていただく。

二．同様に本学の先生ではないのだが、加地伸行（甲子園短期大学）学長も七月十九日の午後、儒教学者としての見地からコメントをなさり、それが家父長中心・男性優位の思想・慣行の陰で泣きをみる女・子供の立場を軽視しているように聞こえたので、前述の懇親会の席で、直接異議を申し立ててしまった。加地先生の論点を印刷したものは配られなかったし、私のメモもないので、具体的な言葉は忘れたが、私は「男達が勝手にはじめた戦争の犠牲になって女・子供が現在

でもこんなに沢山苦しんでいるのに、それを当人達の心がけのせいにするのは余りにも可哀想です」といい、「村松映著『儒教の毒』をお読みになりましたか？」ときくと、まだだとおっしゃる。「あれには儒教の良い点も認められていますが、難点も沢山書かれています。例えば親孝行の徳も強調し過ぎると、子供、とりわけ嫁の人権蹂躙になりかねないと共感いたしました」と申し述べた。ここでそのことを書くのは読者にも、PHP文庫から出たこの本の一読をお推めしたいからである。

三、四日目の七月二十日は英語のみによる非公開の総括会議だったが、私はレセプションのあった三八母屋の個室（といっても講師の部屋と違い、鍵はかからなかったが）に、講師や通訳と共に引き続き泊めていただいたので、朝五時からの教会本部でのおつとめにも、外人講師達とともに出席し、午前中のみの総括会議にも出席させていただくことができた。これらのシンポジウム全体をとりしきられた天理やまと文化会議の井上昭夫氏による、流暢な英語での総合司会と『「元の理」の学際的研究の意義について』の講演、吉田敦彦（学習院大学）教授による「地母神カルトの起源」、および村松一男（本学）教授による『「こふき」と教祖の女性性』という発題のあと、討論に移り、「何かほかに質問・ご意見ありませんか？」ときかれたとき、私は思わず「元の理」に関する、教外者としての率直な感想・真新しい解釈（珍説？）を述べてしまったのである。これも絶対に報告書に載せられるはずはないので、その時とっさに、しどろもどろの英語で、私が何を言おうとしたのかを、特に「天理教と女性」という本号のテーマとの関係に絞って述べてみたい。幸い本シンポの参加者全員に入口で配られたレジメの中に「元の理」全体が印刷されていたので、読者は（注2）に転載するそのテキストを参照していただきたい。

私が特にこの新しい時代・世紀に向かって注意を促したいのは、最後から二・三節目にある、（現代的言葉遣いによれば冷凍精子・人工授精等の可能性をも含めた？）単性生殖・母子家庭的ありかたが、（泥）海で生命として産み育まれ、長い進化の過程を経て、月日親神の守護と意図にそって現在にまで成人してきた人類の、歴史の中には既にあったという示唆なのである。「父親なるいざなぎのみことも、身を隠された。しかし、一度教えられた守護により、いざなみのみことは、更に元の子数を宿し込み、十月経ってこれを産みおろされたが、」（中略）「その後、人間は虫、鳥、畜類などと、八千八度の生まれ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残った。」この胎が男女同数の人間を多胎妊娠し、それらの人間が三尺に成人して、ものを言い始めたとき、一胎に一人ずつ生まれるよう

になり、五尺になったとき、（親神の守護により）海山・天地・世界も皆出来て、人間は陸上の生活をするようになったとある。フロイトの説に反して、人間は発生学的にいっても女性型が原初的形態であるという現代の常識と相容れる人間創造説がここにはある。キリスト教のように、進化論と相容れない天地創造説も、女性は男性のあばら骨から造られたゆえに、二流の性であるという女性蔑視もここにはない。むしろ女性性の尊重、受胎、出産といった女性的経験の重視がある。DNAの構造から見ても、あらゆる生物は草木にいたるまで共通性があり、相互に依存しており、食物連鎖などで或る意味で輪廻・循環しているがゆえに、エコロジカル・フェミニズムとの親近性もここにはあるのではないか、といった事を私は言いたかったのである。私はクローン技術の人間への適用は絶対容認できないし、冷たい冷凍精子等による人工受精よりも、あたたかい男女の抱擁（それは、この宇宙航行時代にあって上も下もない天地の抱擁と考えてもよいではないか）による受胎のほうがずっといいと思っている。また苦労の多い母子家庭よりも、複数の親が助け合い、協力しあって、共に、あるときは踏み台となり模範となって子育てのできる家庭の方が何かと幸せなのではないかと思っている。しかし、不妊の人やシングルの人、母子・父子家庭の存在は厳然たる事実であり、そういった人達のより幸せな陽気暮らしの生き方をも是認し助ける原理（元理）を含んだ天理教の教えは、現代における、未来へ向かっての一つの福音（よき音信）なのではないだろうか。

II．私の知っている或る天理教教会の女性達について

実は前号に「天理教と女性」というテーマで書いてみませんかと奥田さんからお誘いを受けたときから、このことについてなら書かせていただけるかなと私は思っていた。というのは十三年前、本気で大学での専任の就職口を探していた私に、天理大学で私の専門のアメリカについて教える口があるので、応募してみないかとのお声が先輩からかかり、天理教のことをもっとよく勉強したいと飛び込んだのが、近所のある教会であった。一人の紹介者もなく、いきなり出掛けて行ったので、教会長夫妻は留守で、応対に出て下さった質素な身なりのおばあさんは、お目が不自由で、私は住み込みのお手伝いさんかと思った。ところが私の質問にたいして、背筋をしゃんと伸ばして、はきはきと答えてくださり、教義のかなり深いところまで話してくださるので、私は天理教の女性はちょっと違うなと感心した。あとで聞いたところによると、彼女は美容師から転身して教会長にまでなった独身者で、晩年ここに住まれ、もう出直されたとか。

昨年から四代が会長を引き継がれたが、当時は三代の時であった。会長夫人は、時々お会いする度に、天理教の教義や心掛けをこまごまとお話して下さり、それが全然押しつけではなく、身近な人や出来事の話から自然と入っていくのである。例えば私や息子がめちゃめちゃ忙しいというと、「このご時勢に、退屈なよりも忙しいのは有難いことですね」とおっしゃる。そこには物事を良い方にとって感謝する心、いわば積極的思考の力がある。(感謝の心は免疫力を高めるというではないか。)拙宅に会誌などをもって、行動のお知らせなどに来て下さる時、具合が悪いところがあれば、手を当てんばかりにして、心を込めておさづけをして下さる。そして「朝夕のおつとめのときに三日三夜、心を込めてお祈りをしたお供えです」といって小さく小分けして包んだ「御供」のお米を届けてくださる。少しずつ噛んでいただくと力がつくのだそうである。私は一度に沢山お米にまぜて炊いてみんなでいただいてしまうことがある。家族が何か大変なことを乗り切るとき、私も祈るような心で炊くのである。私がこの教会からわけていただいたTenrikyo:Its History and Teachingsという本を読んで感銘を受け、首尾よく天理大学に就職してから後も、実は脳梗塞の軽いのをしたり、足の骨折をして松葉杖をついたり、前述の婦人科の病気をしたりしたとき、必ずおさづけをしてくださった。「必ず治していただけるように」という真摯な祈り心が伝わってくるのが、私にはしみじみと嬉しい。そのせいか、たいして欠席もせずに、十一年間をなんとか専任で、九科目という、文部省から認可がおりた中で私が知る中では最大数の科目を教えさせていただいた。「大難を中難に、中難を小難に通らしていただいて感謝ですね。普段は当たり前だと思っている体の機能がちょっとでも狂うと、体は自分の意のままにはならない、親神様からの借りものだということがわかりますね。」と口癖のようにおっしゃる。「教会長夫人として一番大変なことは何ですか?」という私の問いにたいして、「よくあちこちお尋ねしては、天理教のお話をしたり、おさづけをしたりすることです。それに祭典とかいろいろの行事があるとき、寄り集まって下さる人々に喜んでもらい満足してもらえるように心配りをすること。日常のことは住み込みの人たちがやってくれます」との事だった。

実は私が天理大学に勤めているというと、「入信をしつこく迫られますか?」と聞かれることがある。「いいえ、ちっとも」と答えながら、そういえば入信の第一歩である別席(希望者の五十人位をひとまとめに、本部役員が教師=とりつぎ役となって、教祖伝、元の理、心の八つのほこり=悪の説明と悪しきを払うためのお手振りの実技等を約一時間半にわたって講義、これに

九回出席すると、「おさづけの理」を教祖殿でいただくことができ、病を癒す力を備えた、陽気暮らし実現のための用木になることができるとされる）の初席につきそってくださったのも、会長夫人だし、その後、京都在住だから（住んでいる所によって違うが）一ヶ月にいっぺんずつ出席して下さいよ、と促されるのも彼女であった。そのたびに私は、「天理大学で教えるということが、私の第一の義務であり、これを家庭生活と両立させることが第二の義務だと心得ておりますので、それと矛盾しない、無理のないペースでやらせていただきたいと思います」といってきた。私は本当に、死にもの狂いであるほど忙しかったので、一年にいっぺんというような、破格のペースにもたいして良心の呵責を感じないで、七席まできた。その途中に東京の実家の母、隣家の舅、大阪や九州の姉が亡くなり、キリスト教式のお葬式を出し、自分の死後の収まり方も考えるようになった。「信条教育」というのにも、欠かさず出て、ずいぶん落つる話にがっかりさせられたこともある。そうした時に別席で聞かされる元の理に、はじめは何度聞いても理解しがたい所があって、「私は天理教の教義を一〇〇％信じていないのだから天理教の信者にはなれない」と思った。実家では私で三代目、婚家では二代目のキリスト教の教義にも、余りにも非科学的なところや、女性蔑視的なところがあって、「私は一〇〇％クリスチャンにはなれない」と思ったものだったが。一九五〇、六〇年代のアメリカ・キリスト教思想をリードしたリチャード・ニーバーが、「クリスチャンであることは、私の実存的運命なのです」といったが、それほど宗教はその人が根をおろした実存的・文化的土壌から切り離せないものなのである。だから私はやっぱりキリスト教的文化から切り離されることは出来ない。そのことをよく分かり、その人の主体性を尊重し、その人が受け継いだ他の宗教からも学ぶところがあるのでは、と思って決して無理強いをしない天理教は寛容であり、謙虚であり、柔和であり、天然自然に成ってくる天の理、中庸、常識を重んじる。別席で繰り返し聞かされる、心の八つのほこり、つまり「おしい、ほしい、かわいい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまん」は、それ自体を変えられない原罪とみなすのではなく、「過ぎたるは及ばざるがごとし」の中庸の徳に達することができるよう、心掛けを変えて成熟をめざすのが天理教の大きな特徴であると私は理解している。

以上、述べた点は、天理教がオウム真理教などとは決定的に違う点であって、前二六号の九頁にある、「今の天理教本部は、（中略）オウムとたいして変わりはない」という福島ひとみさんの説には私は賛成しかねる。同じ著者が二頁で、天理教のある女子寮（大学のでは

ない）は、「金を取らない売春宿」と非難するのに対しては、それは言葉の矛盾であるし、「まさか」と思ってしまう。しかし、著者と同じ時に同じ寮に寝起きしなかった私には、決定的反論は出せない。「肉欲は罪であり、罪の値は死である」と厳しく決めつけるキリスト教にたいして、人間の夫婦の性の営みを、子孫繁栄、教勢伸長の陽気暮らしにもつなげうる、生の根源的営みとして、おおらかに認めるところのある天理教、そのゆえに股を股倉、子宮をお宮、とこじつけて、崇めるとまではいかなくても、蔑視はしない俗説まであるという天理教のことだから、合意による、性の饗宴のいきすぎが、時にはあったかもしれない。しかしそれは、例えば現今のアメリカで男女の寮が入り組んでいる所でも、ありうることではある。もしそこに、セクハラのように、強者の、力による弱者の性の利用が万一あるとしたら、そんな人権蹂躙は即刻やめてもらわなくてはならないが。

ここにそんなことはどこ吹く風、天理で「立派な道の台として成人するよう」仕込んでいただいている女子青年の具体例として、前述の教会の末娘さん（別科卒）に登場していただこう。彼女は、ある本部役員の天理でのお屋敷に、女子青年として努めて十ヶ月目。その日課を聞き書きすると、次のようである。

その役員さんは母君も本部役員として内儀係（前号で薄井篤子さんが詳述）を交代で務められ、時には、教祖殿に泊まられることもあるそうである。夫人もかぐらづとめのつとめ人衆である。彼女の仕事は、このお屋敷の、とりわけ母君の衣食住のお世話である。朝づとめが夏は五時、冬は七時にあるので、その三十分前には交代で起きて掃除、神饌の用意、おつとめ着の用意などをする。つまり夏は四時半、冬は六時半に起きることがしばしばだという。朝食は八時半。お膳立てした後、ご家族と部屋は別だが、ほとんど同時に同じ物をいただくという。後片付けをし、自分の身支度をし、掃除や言い付けられた用、自分で気が付いた用などをする。月に二・三回は十時から四時までの間に和裁を習いにいかせていただき、月に一回は華道の先生がおけいこに出向いて来てくださる。最近では自動車の運転免許を取りに通うことも、勧められた。十二時前に夫人や母君が別席のおとりつぎ（つまり前述の先生役、これができる本部役員の女性は、本当に限られているという）や別席のお誓いの立合い（別席の教室に入る前に、渡される「別席のしおり」にかいてある「別席の誓いの言葉」を受講者が読み上げるのを聞いている事）から帰られるので、食事の用意と後片付けをし、二時に撤饌をするまで、かなり自由な時間がある。六時から六時半には夕食がはじまるので、夕食の準備（その前にはもちろん買物）をする。六時四十五分と七

時四十五分のいずれかに交代で女子専用の千人風呂に入る。片付けや台所掃除をした後、八時四十五分からご家族揃って「みかぐらうた」を一下り、「おふでさき」を順番に拝読し、平成十年十月二五日に四代真柱になられた中山善司様の公布された「諭達第一号」を拝読なさるというところが、「立派な道の台としてのおしこみ」にふさわしいと感心させられる。同時に、外で仕事をする人（天理教において、その役割は男女を問わない。立場にふさわしいことをする）を支える陰の仕事としての家事がいかに大変なものであるかが良く分かった。それを一人で引き受けるようになった現代家族の主婦の仕事が、いかに労働強化になっているか、まして兼業主婦というか、一人前の仕事を外でもやりつつ、家事・育児をセカンド・シフトとして一手にひきうけたらどんなに死にもの狂いになっても不思議ではないことがよくわかった。

天理では掃き掃除、拭き掃除、お節会でのお餅配り等に男性の姿を見る事が多い。それでもなお、大切なお役目を持つ女性のお世話をする人は、やはり女性である。それも、よほどよくお道の事の分かった、選りすぐりの家柄の、みめもきだても佳き人にお声がかかるに違いない。その娘さんの母君である前述の（前）会長夫人はそのご両親とも、本部役員だったし、そのお名前は二代真柱さまのご命名だという。しかもご夫君から辿られる代々の家こそ、不思議なご守護をいただいた筋金入りの天理教信者なのである事が、貸していただいたその教会の教会史から分かった。すなわち、初代夫妻は菓子屋を京都の繁華街に開き、たいそう繁盛していたが、二人とも小さい時から親に死に別れ、継父母に育てられる苦労を味わった。そのうえ初代夫人は体が弱く、四十歳まで持たないだろうといわれ、二人の子供にまたもや継母の苦労をさせるに忍びなかった。時々店に来る同業者の話から因縁を悟り、因縁をきりかえるために、菓子屋をたたみ、ある教会に住み込み、夫婦で布教に飛び回った。今から八十一年前、大正七年に分教会を建て、のちに移転、昭和三十二年に今の所に移転し、十七年前に今の教会の形へと、大きく改築した。二代夫妻の時、一九六八年に教会がサンフランシスコに不思議なご守護で建てられ、翌六九年十月二十七日にその長男夫妻が三代として京都の教会の会長となり、十一月三十日にアメリカの教会の設立の儀式が執り行われた。それは八月二十一日に八十九歳の高齢をもって初代夫人が穏やかに、二代会長の帰っていらしている前で出直されたからこそ、何の心残りも心配も無く祝われた儀式だったのである。二代会長はその後アメリカで英語を習ってめきめき上達され、信者も増やされた。夫人は長男夫婦の子供達を呼び寄せ、その成長を楽しみに育てられた。幼い孫達

は小学校では英語が分からなくて苦労したが、今はシカゴ大学の博士課程で論文を書いておられる。二代夫人は京都の教会では長男夫婦や大勢の孫達と仲良く暮らしておられたが、九十歳の高齢をもって出直された。その教会の歴史を読むと、初代、二代、三代の夫人たちの丹精は大きく、今も海外にまで躍進する教会の基盤を支えておられることをひしひしと感じるのである。

（注1）アメリカでは例えば全国英語教師協議会(National Council of Teachers of English)がGuidelines for Nonsexist Use of Language (1975,1985)を、Casey MillerがKate Swiftと共著でThe Handbook of Nonsexist Writing (1980,1988)を出版。性差別にならないためのルールのあらましは、拙稿「英語の中のsexism」『時事英語研究』一九九〇年九月号(研究社)一四―一七頁参照。

（注2）紙数の都合で割愛。入手を希望される方は編集部にご連絡ください。

「わが中山みき」（前号）を拝読しての感想

勝又　美保

福島さんの原稿を読ませて頂き、同じ「中山みき」を信奉する信仰者として、その強い信仰心、感性に感銘するところがありました。しかし、福島さんの説明される教会本部の実状が、必ずしも全て正しいとは言い難いため、天理教教会本部内に身を置く一信者として、どうしても一言、ここで述べさせていただきたいと思います。

「本部勤務者の女子寮が売春宿である」と福島さんはおしゃいましたが、その表現方法は、女子寮で売春が行われていて、寮生全員が売春婦ということを指すように思うのですが、そのような事実はありません。女子寮は男子禁制です。又、私は本部組織内に身を置く人間として、はっきりと申し上げたいのですが、本部の組織の中では、確かに「やる気のない人たち」もいる反面、一生懸命働いている勤務者も多くいるのです。

私は実質、天理中学校に常勤講師で出向していますが、籍の方は教会本部の海外伝道部という部署にあって、実際に教会本部勤務者と共に海外伝道部の中にある寮で生活をしています。一年目の勤務者は今も二万

円です。寮費、食費は無料といえども、大変な中、私の仲間たち、先輩たちは皆、がんばっています。実際にその「女子寮」に住んでいる若い女の子たちも私は知っていますが、少ない「お与え」(給料)でも「世界たすけ」のために頑張ろうと、信仰心を燃やす必死の態度を彼女たちの中には見る事ができます。

私はたまたま天理中学校への派遣となりましたので、一般的なお給料を頂いていますが、もし海外伝道部内で勤務していたとすれば、二万円の「お与え」であったでしょう。だからといって私は自分が売春婦になったとは到底想像できません。私なりに信仰的な修行の一環として、少ない「お与え」の中にも信仰の喜びに支えられ、しっかりと任務に勤めたであろうと思います。

天理教教会本部内で意識的に信仰し、懸命に働いている者といたしましては、「オウムとたいして変わらないカルト集団、堕落した地獄絵の世界」と天理教教会本部を攻撃されてしまえば、いたたまれない気持ちにならざるをえません。

無論、天理教が組織である限り、汚い部分はたくさん持っていると思います。その悪い部分を改善するために、私は一教内者として、これからも必死の努力を続けて行こうと思っています。

1998年活動報告

3.7	例会「フェミニズムとエコロジー」 発題＝奥田暁子
4月	Womanspirit　№25発行
6.28	例会「生殖技術と宗教ーヨーロッパの場合」 発題＝支倉寿子
9月	Womanspirit　№26発行
10.11	第8回シンポジウム 「自己決定権を問い直す」 講師 金井淑子・森本あんり・中野優子
12.3	例会「韓国女性の宗教環境」 発題＝宋連玉

(なお、1998年度の例会、シンポジウムの企画は岡野治子・中野優子・支倉寿子が担当しました。)

1998年会計報告

＜収入＞

繰越	253,703
年会費	213,000
冊子売上	53,980
集会費	33,249
合計	553,932

＜支出＞

印刷費	176,000
編集費	5,765
送　料	63,600
講師謝礼	57,400
施設費	11,900
文具・コピー	8,029
合計	322,694
現在高	231,238

多義にわたっている。

本書の著者ポーリン・オリヴェロス(1932年生まれ)は、現代音楽の作曲家でアコーディオン奏者、カリフォルニア大学音楽学部の教員を経て、現在は「ディープ・リスニング・バンド」を組んでグループ演奏、またメディテーションを利用した「音とパフォーミングのワークショップ」などを開く多面的個性の持ち主である。さらにオリヴェロスは、フェミニストであると同時にレズビアンであり、その個性が独創的なメディテーション解釈を生み出している。

本書は「そもそも音を聞くこと、音を出すことはどういうことなのか」を問いかけにしている。この場合の音とは、楽音や日常風景のざわめき(サウンド・スケープ)ではなく、私たちの身体の深みから出てくる「原音」への希求である。25のグループ・エクソサイズを紹介した本書は、「原音への遭遇」をフェミニスト的瞑想によって達成するものである。

具体的にはつねに自分の呼吸の循環を感じ瞑想状態に入りながら、自分の身体の深みやまわりの環境の細部(気配といってもよい)から聞こえてくる音を聞き、また言葉以前の音で発声してみる試みである。なぜこれがフェミニスト的かというと、①身体からすべての音に遭遇すること②原音へ向かうためにしばしばfall(落ちる)感覚を体験すること③権力やステイタス以前の自分の音に遭遇すること、があるからだ。音や音楽はつねに時代の権力コードに無意識に組み込まれており、現代では音は、身体から解離し、上昇的発声(男性原理)を基本として自分の固有の音を感受することは至難の業である。

レズビアンとして、また芸術家としての深い孤独のなかから、独自の瞑想的方法論を編み出したオリヴェロスは、驚くべきことに男性とのコラボレーションも見事で、彼女の率いる「ディープ・リスニング・バンド」は彼女の他は男性で、演奏中、ジェンダー・ロールの転換がなされていると思われる(つまり、オリヴェロスが「男性」になり、男性が「女性」になる)。また男性占有と呼ばれる「メカ」にもオリヴェロスはやたら強く、電子音楽の奏法も見事だが、男性作曲家と決定的に違うのは、どんな電子音、機械音でも身体から切り離さず演奏することだ(つまり「無機質音と身体有機質の統合」というポスト・エコロジーの問題を彼女は、すでにクリアしている)。高度情報化やジェンダー転換の問題が避けられない時代のフェミニズムを考えるうえでも、オリヴェロスは重要な人であるだろう。(津田広志)

「セックスするなら眠りたい」

この本は、30代の乳幼児をかかえる女性たちが子どもへの性教育を足がかりにしながら自らセクシュアリティを見つめ直し、「エイズとともに生きる時代における子育てとは」という大きなテーマを自らのこととして考えていった交換ノートです。

実を言いますと、言い出しっぺは私です。文中では仮名になっていますが、書き手でもある私が自分たちの本を書評するというのはどうも気恥ずかしいものですが、なるべく客観的に内容に触れていきたいと思います。

私がある育児サークルのメンバーに声をかけたところ、このテーマに賛同して下さったのが4名。その4名で当初はノートを郵送し合いました。と同時に、性教育の専門家でユニークなワークショップを展開していた小貫大輔さんという方を講師に招き、5回の連続講座を企画・運営しました。この本に記されている94年から95年にかけては小貫さんのワークショップのための準備会や開催時期とも重なっていました。みなで粘土をこねてペニスを造ったり、女性性器の写真集を見たり、日頃なされない事柄を話題にしていった時期でもありました。その中で私たちは本質的に大きく変貌していきました。性はタブーではないこと、性を考えることは実は女性問題を考えることでもあったことに気づいていったのです。

本書は書店では扱っておりませんので、お申し込みはフェミックス(TEL.03-3424-1637、FAX.03-3424-3603)までお願いします。定価950円。つまんなかった、とは言わせませんのでぜひぜひご購読のほどを!

(岡村聡子)

「年表　女と男の日本史」

女と男の時空編纂委員会編　藤原書店

4,800円

既刊書『女と男の時空――日本女性史再考』(全6巻)の別巻としてつくられた年表編である。5年がかりでやっと完成を見た。これまで近代以降の女性に関する年表はいくつもつくられていたが、古代から現代までを網羅した年表はこれが初めてである。また、本書は「読む」年表を目指している。そのため、各ページは一般事項・女と男の関係事項・「キーワード・キーパーソン」の三段構成になっており、10ページごとに重要なテーマについて解説する「コラム」のページが設けられている。政治権力の盛衰・転変を中心とする事件史の色彩が濃い従来の日本史年表と違って、本年表はすべての時代を貫通して持続する「女と男の関係史」であることに特徴がある。また、日本をとりまく朝鮮・アジア諸国、沖縄、アイヌとの関係にもとくに力が入れられている。執筆者は河野信子、奥田暁子他50数名に上る。

「新・哲学講義6 共に生きる」

川本隆史編　岩波書店

本書全体のテーマは共生。川本隆史による「講義の7日間」、金井淑子、金子郁容、鄭暎恵らの論文から成る「セミナー」、それに「思想史年表」から構成されたとっつきやすい哲学書。「講義の7日間」の内容は孤独と共生、ケアと共生、教育と共生、エコロジーと共生など生態学に由来する共生と社会思想に由来する共生の両方が含まれている。いずれのテーマも川本さんの共感する人々の具体的な仕事を手引きにしたということで、小松美彦、立岩真也、森崎和江、ミース、マーチャント、最首悟などの思想と生き方を通して「共に生きる」意味が探求されている。

「はじまりはいつもきみとぼく――校歌に見るジェンダー」

あだち校歌ジェンダーチェックメンバーズ編・発行

校歌に出てくる男女表現の違いはこのままでいいのだろうか？という素朴な疑問から足立区の女性グループが校歌のチェックに取り組み、足立区内の小中学校116校の校歌を収集、検討した結果をまとめた冊子。これによると、性別を表す表現がない校歌は17.3%、明確な性別表現がみられるもの4.3%、「ぼくもわたしも」と男が先になっているものや一般に男に使われる「われら」という表現が頻出する男子優位の歌詞を持つ校歌は76.5%であった。ほとんどの校歌が戦後につくられているにもかかわらず、このような歌詞になっているのは、作詞者が圧倒的に男性であることが関係しているのだろう。収録されている校歌の歌詞がどれも似たり寄ったりで陳腐な表現が多く、おそらく子どもたちの記憶に長く残ることはないようにも思われるが、入学式や卒業式の度に唱われるわけであるから、無意識に影響を受けると考えられるし、なによりも学校を形成しているメンバーの半数を考慮していないというのは問題だ。報告書を読んでみたいと思われる場合は、下村美恵子さんまたはゆじょんと社（TEL/FAX03-3302-9219）に連絡して下さい。1部300円、送料180円

「ソニック・メディテーション」

ポーリン・オリヴェロス著　若尾裕十津田広志訳　新水社　1,500円

メディテーション（瞑想）への関心は、ここ30年間くらい日本のみならず世界的に宗派を越えて広がっている。いまでは宗教の修行法以上に、忙しい日々のつかの間のリラクゼーション法から現代芸術における創作の方法に至るまで、その目的・使用法は

INFORMATION

「女たちのフランス思想」

棚沢直子編　支倉寿子他訳　勁草書房

3,000円

フランスの女性思想家たちの論文集であるが、単なる翻訳書ではなく、編者がさまざまな分野の思想家のなかから選んだ9人の女性たちによる論文（新たな書き下ろしやインタビューを含む）が収録されている。巻末には編者による長文の解説が付されている（これが面白い）。著者はM・ペロー、D・コンブ、E・シクスー、J・クリステヴァ、L・イリガライなど歴史学、社会学、哲学、精神分析の分野の研究者。編者によれば本書を編集した意図はフランスの女性たちが思想形成してきた共通基盤を探り、現代フランス思想の全体像を描くことにある。なぜなら「80～90年代の日本のフェミニズム『理論家』たちがしたような西欧理論の輸入、解説、日本への応用という接し方では」西欧思想の枠組みが見えてこないのと、日本のフェミニズムがアメリカ中心で、情報の入手もアメリカ経由であるため、フランスの女性たちの思想が正確に伝わっていないからである。

確かに、クリステヴァやイリガライの名前は日本でも有名であるし、その思想も断片的に日本のフェミニズム関係の本に登場するが、彼女たちがフランスの思想界でどのような位置づけにあるのかも、またフランスのフェミニズムの全体像もこれまであまり分からなかった。本書を読んで、フランスの女性解放運動がフェミニストと非フェミニストに二大分裂したこと、分裂の最大の争点が男女の差異を肯定的に捉えるかどうかにあったことなど初めて知ったことも多い。

「人権について」

S・シュート他編　松田まゆみ他訳

みすず書房　2,900円

オックスフォード大学では毎年、人権に関連あるテーマについて国際的に著名な講師を招いて講演してもらう「オックスフォード・アムネスティ・レクチャーズ」という連続講座を開いていて、講演の記録を一冊の本にまとめている。本書は1993年度の講座の記録である。1993年という年は今でも解決しているわけではないが、ボスニア戦争のまっただ中にあって、「民族浄化」や女性やこどもに対する組織的レイプなど、戦慄すべき報道がメディアで繰り広げられていた時期である。この事態を前にして人権をどう考えるかは講師たちにとって切実な問題であった。本書に登場する講師はジョン・ロールズ、キャサリン・マッキノン、スティーヴン・ルークスなど7名。講師たちは人権理論が普遍性を持つ可能性については関心を共有しているが、リベラリズムに対しては擁護の立場に立つ人もいれば、批判の側に回る人もいる。例えば、リベラリズムに批判的なマッキノンは男たちがつくりだし、解釈してきたこれまでの国際法が性的虐待行為を戦争犯罪と認識できなかったことと、民間レベルの女性に対する人権侵害が見落とされてきたことはセットになっているのだとして、形式的平等概念（実際は女性を排除するか周縁においやっている）から実質的平等概念への切り替えを提唱している。従軍慰安婦問題を考えるうえでも大きな示唆を与えてくれる本である。

編集後記

本格的に編集のお手伝いをして、面白くもあり、大変でもあった。「家族」というテーマはどうしても自分を語ることになり、書いていただけるかどうか不安だったが、六編を載せることができた。ただ、一気に読むと食傷気味！になりそうで少し心配している。「硬軟取り混ぜて」を目指したのだが、少し偏ったかもしれない。宗教から遠い私は、宗教は家族の問題とどう結びつくのか、力になるのか、かえって邪魔なのか、知りたいところである。次号も続編を兼ねて編集できればと思っている。「私」を語る文章なら書けるという方、宗教と結びつけて書いて下さる方、是非次号に原稿をお寄せ下さい。（中島枝美子）

フェミニズムの視点をろくに持たず、宗教からも足が遠のいている私は、正直言って、編集協力者としてどうしていいのか唸ってしまう。そこで、まずは自分の身近なところに目を向けてみた。すると、私の周りには親子関係の葛藤をかかえている人が比較的多いことに気がついた。今回の「家族」のテーマに応えて下さった原稿は、ほとんどがきわめて個人的な色彩が強い。今までの本誌のあり方からすると、趣が大分違うようで、これで良かったのかなあと正直思う。私の原稿の依頼の仕方も含めて。でも、自分の問題を語る方が説得力があることもある。結果的に宗教との絡みが薄かったことは、今回はお許し下さい。ご意見、ご感想を含め、書きたいテーマがありましたら、是非原稿をお寄せ下さい。会員のみなさん、紙面をつくるのはあなたです。（平嶋三生子）

今号の「特集」は中島、平嶋のお二人が発案から原稿集めまですべて担当して下さいました。それ以外はわたしがまとめました。今回のテーマは昨年シングルになることを選択したわたしにとっても大いに関係がありますが、今はまだ整理して語れる時期ではないので、わたしの「物語」は今回はパスさせていただきました。ちょうど今、所得税の申告時期ですが、申告の書類を書きながら現在の日本の税制はやはり夫に養われる妻と子という核家族が基本になっていることを改めて感じています。現実にはそのような家族の比率が減少していることは統計でも裏付けられているはずですが、制度の方は旧態依然。家父長制はイデオロギーとしてだけでなく、制度としてもがっちり生きているということです。

一九九九年度の会費をよろしくお願いします。なお、今年の例会は支倉寿子、平野裕子、中野優子のみなさんが担当して下さることになりました。（奥田暁子）

Womanspirit No. 27

一九九九年三月発行

発　　行　フェミニズム・宗教・平和の会

連 絡 先　〒一八〇―〇〇一四

武蔵野市関前五―五―二五

T／F　〇四二二(五三)八七四六

郵便振替　〇〇一七〇―九―八〇三一

定　　価　八〇〇円

印　　刷　㈲オクノプリント社